




朝鮮の民俗








朝鮮の民俗

方　晥　柱

朝鮮・平壌
外国文出版社
1993

はじめに

金日成主席はつぎのように述べている。

「5000 年の長い歳月にわたって引きつがれてきた朝鮮人民の歴史は、そのあいだに創造された文化遺産という形で伝えられています」

文化遺産には、受難の歴史のなかでも大切に守られてきた朝鮮人民の良風美俗が秘められている。

今日朝鮮人民は、**金日成**主席と朝鮮労働党の正しい指導のもとに、父祖伝来の良風美俗を社会主義的生活様式に合わせて開花させている。伝統的民族服や建築、料理や遊戯、礼儀作法や祝祭日行事などは、その伝統が生かされながらもいっそう洗練されている。

本書は朝鮮の民俗について概述している。

著　者

目　　次

3　食　物

主食

副食物

菓子類

飲み物

4　競技と遊戯

弓術

相撲

綱引き

ブランコ、板とび

将棋、ユッ遊び、コヌ

農楽

仮面劇

子供の遊び

5　儀　礼

あいさつ

誕生祝い

婚礼

葬礼

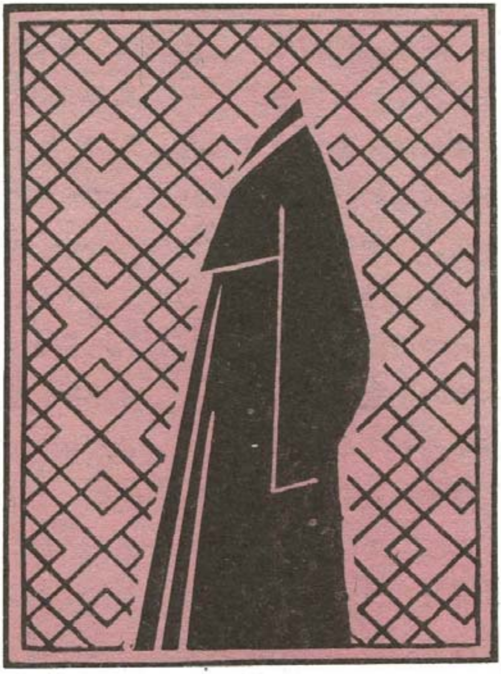
6　祝祭日

正月

中秋と七夕

冬至

1　被　服



古来朝鮮人は麻や絹、紵布(ちょふ)や木綿を布地に使っている。麻はすでに紀元前数千年紀の新石器時代に織った形跡があり、絹は古朝鮮時代、木綿は 14 世紀に織りはじめた。紵布も古くから織られたが高麗時代にいたってその技術はきわめて高い水準に達した。

多様な絹織物が高級布地にあてられていたが、春、夏、秋向きには薄絹の甲紗(こうさ)、カラムシが、冬向きには繻子(しゅす)などの緞子(どんす)が使われた。きわめて稀ではあるが、獣皮や獣毛、植物繊維も一部で服地として使われた。

朝鮮の民族服は、朝鮮人の体格や朝鮮の温和な気候、農耕を主とする労働と、オンドル住まいの生活環境、そして優雅なものを好む民族的情趣にもとづき、長い歳月にわたって形づくられてきたが、各時代の社会的・歴史的影響をうけていることは言うまでもない。

古書や高句麗古墳壁画を見れば、朝鮮の民族服装は古代にそのきまりができ、三国時代にいたってさらに発達したことがうかがえる。

朝鮮の民族服は、三国時代すでに下体衣と上体衣、多様な外衣をそなえていた。

高麗時代、李朝時代になると朝鮮の民族服も種類別にその長さと幅にやや変化があらわれ、さらに外衣は性別と年齢、職業と身分によってさらに多様な形をとるようになった。

こうして民族服の基本型は現在のものに定着した。

男子服

男子の民族服には、下体衣のパジ、上体衣のチョゴリ、外衣のチョッキとトゥルマギ（コートに類す）がある。

パジは腰と股の幅が広く、腹部で大きくひだをとって腰ひもを結ぶ。裾もひだをとって、やはりひもを結ぶのである。

旅に出たり活発な動作をしたりするときは膝下に脚絆をつける。

チョゴリは前開きになっており、上えり、えり、おくみ、袖、結びひもがついている。

えりは立てずに首のまわりをめぐって前の方で揃え、幅２センチメートル程度の白布で上えりをつけるが、清潔さを保つため付け替えることができるようになっている。

おくみは右側を内に、左側を外にして重ね、右側の胸部の上でひもを結ぶようになっている。

結びひもは幅３～４センチメートル、長さ 40～50 センチメートルほどの長さで裏つきになっている。ひもは飾りとして結び目をつけて結ぶ。

服の色は白が多いが、グレーや水色など多様で、普通は上下を同じ色にする。

チョゴリの上に外衣を着る。チョッキは、袖とえりがなく色や柄はとりどりで、前をボタンで止め、ポケットが上と下に２つずつついている。

トゥルマギはチョゴリを長くしたような形で、裾は末広がりにひざ下までくる。

トゥルマギに似た外衣としては、昔、上流階級が着用した衣、道袍(どうほう)があり、氅衣は官吏が、道袍は学者が着た。氅衣はトゥルマギとは異なり、右左両側と背後が裾から開かれ、袖が広く、白や水色の紵布でつくられ、四季を通じて単衣として着用された。腹部には色によって身分を表すふさ帯がつけられた。道袍も氅衣と似ているが、背部を裏つきにし袖がさらに長いだけである。

中流階級のそれには丈の短いマゴジャがある。これらの外衣は、現在舞台の上でしか見ることができない。

仕事着としては上体衣のトゥンゴリ（袖なしの胴着、チョッキに似る）、下体衣のチャムベンイ、外衣の大きなチョゴリがあった。パジとチョゴリ、チョッキとトゥルマギはいまでも稀にではあるが、老人たちが着用している。

婦人服

婦人の民族服には下体衣のチマ、上体衣のチョゴリ、外衣のトゥルマギなどがある。

チマには腰にまわす裾の広いコリチマ（イプチマ）と筒状のトンチマがあり、ともに上部にこまかくひだをつける。

コリチマはほとんど引きずるほど長くする。歩くときには右あるいは左にややもち上げなければならない。

トンチマも晴れ着の場合は長めにし、ふだん着は短いが、丈は年齢によってまちまちである。

布地や色は季節によって異なり、柄は多様ではなやかである。

婦人のチョゴリはえりの先やおくみ、裾に丸みをつけるなど男子服より曲線美が生かされ、また色や柄もはなやかである。

かつてチョゴリの地色は緑が喜ばれ、黄色のチョゴリも礼服とされた。緑のチョゴリに赤いチマを着用したのを「緑衣紅裳」と言って最上の服装とされた時代もあった。また娘や婦人は藍紫色、えんじのチョゴリを、中年婦人は水色を好んだ。

また一種の装飾として回装つまり袖口、えり、ひも、裾などに別色の布をあてたチョゴリを着る習俗がある。さらに脇にも別色の布をつけたものを三回装チョゴリと呼ぶ。回装は一般にひもとえりはえんじ、袖口は藍色にするが、それを全部えんじにする場合もある。回装チョゴリの地色は緑が喜ばれた。

婦人のチョゴリは短くぴったりと身につけ、チマは長くゆるやかにふっくらとした味わいをもたせて着用するのが特色である。

婦人用のトゥルマギもチョゴリを長くしたような形で、上質の布でつくり、外出用にする。

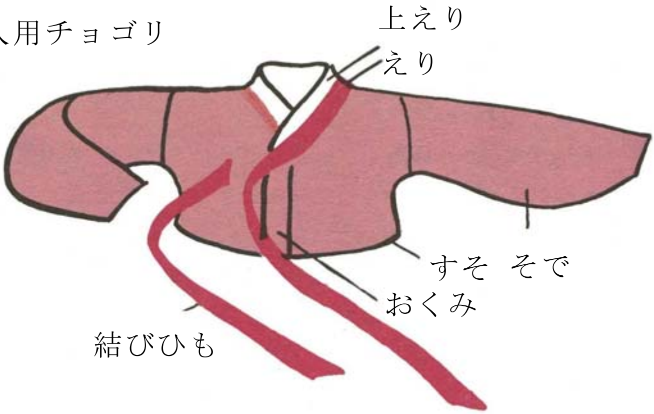
寒い日にはチョゴリの上にトゥンゴリや裏に毛皮をあてたチョゴリをはおる風習もあった。それは色や柄を派手にし、裏につけた毛皮が外部にはみ出るようにしてぜい沢を見せびらかす洒落着でもある。

チョゴリ

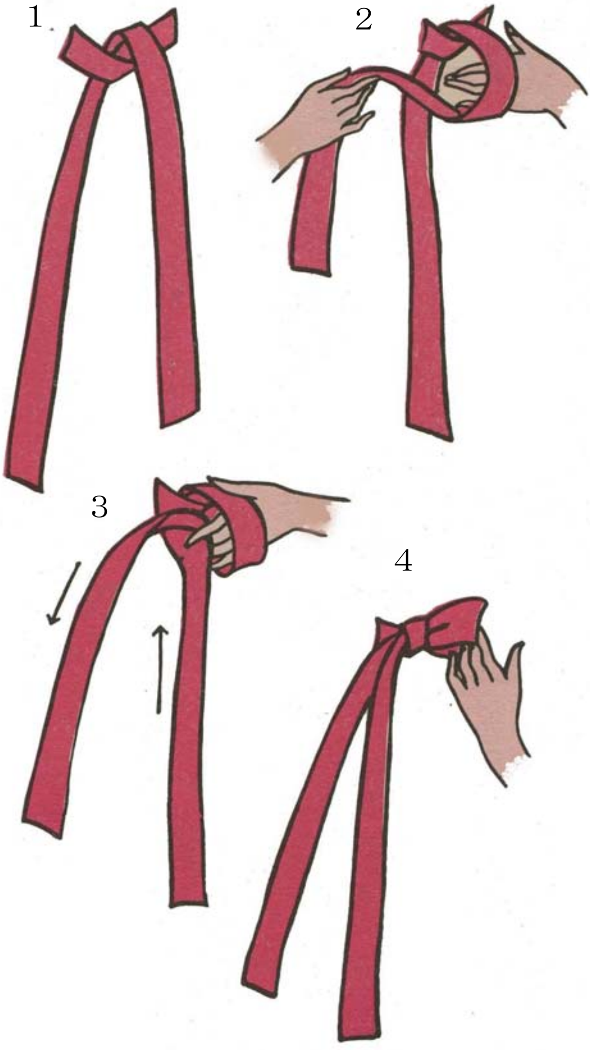
男子用チョゴリ



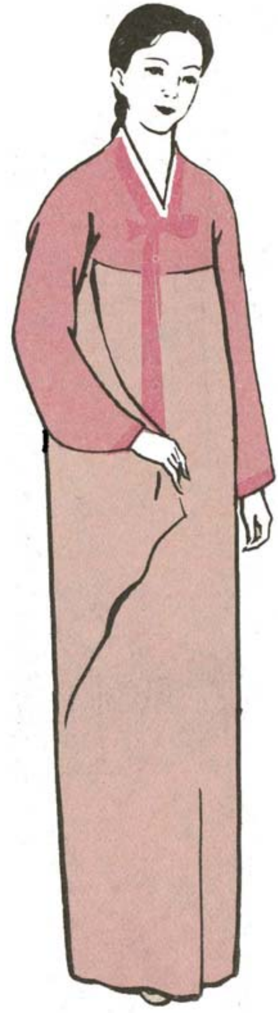
婦人用チョゴリ



チョゴリひもの結び方



チ　マ

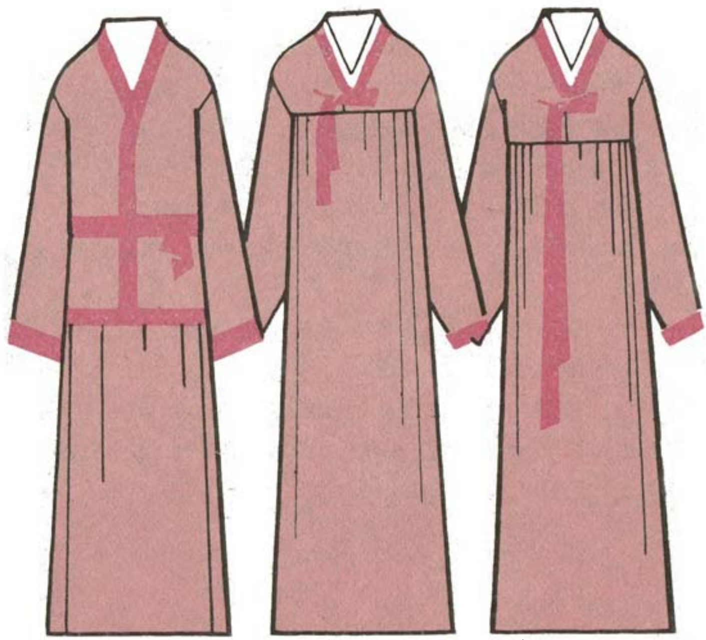


コリチマ



トンチマ

チマ・チョゴリの型の変遷



古朝鮮と三国時代　　高麗と李朝時代　　今日のチマ・チョゴリ

ほかにも外衣には円衫（えんさん）、ホワルオッ、羅衫（らさん）などがあるが、現在では舞台の上でしか見られない。

円衫は色ものの緞子や白絹の礼服であり、合襟に後ろの裾が長く、袖は色ものの布で段だらにしつらえてある。

ホワルオッは円衫と似ているが、袖口と前の裾にはなやかな花の文様をあしらっている。羅衫はえんじの色地にえりをつけ、袖は段だらにした礼服であった。

仕事着として上体衣のチョクサム、下体衣のトランチマ、モンダンチマ、台所着のヘンジュチマ（前掛け）がある。

チマ、チョゴリはいまでも祝日や憩いのひとときなどによく着用される。

今日、朝鮮の婦人は民族的伝統を生かしながらも現代的美感に合わせて上質の華麗な色彩と文様のある衣服を四季別に着用している。

子供服

子供服は、大人物と形は同じだが、子供の生活と好みに合わせて仕立て、肌触りのよい布地を使い、色もとりどりである。

特色のある子供服は、袖を赤、黄、藍、緑の布地で段だらにしたセクトンチョゴリである。男の子はせいぜい２歳までに限られるが、女の子は小学校時代にも外出着とする。女の子の赤いチマにセクトンチョゴリ姿は人びとの目を楽しませている。

かぶり物とはき物

時代によって違いはあるが、男子の代表的なかぶり物は冠（かんむり）である。頭部を円筒形にし広いつばをつけたもので、最初は主に夏の日よけ用に使われた。ところが、封建時代の末期には季節にかかわりなく室内でもかぶり、これを礼儀とした。

着用するときは、髪が散るのを防ぐために、冠の下に馬の尾などでつくった網巾（もうきん）や宕巾（そうきん）をかぶった。雨の日には冠におおいをつけた。冠の材料は葦、竹、松のやどり木、絹、木綿、紙、馬の尾などである。

ひところ婦人も冠をかぶった。形は男子のそれと同じであるが、絹、竹、油紙製のものに花鳥を描いたものが少なくなかった。

これらのかぶり物は、いまでは舞台に名残りをとどめているだけである。

婦人は白布をかぶることもあるが、いまでは主として年寄りにかぎり、地方によって多少違ったかぶり方をしている。

はき物は用途や好みに応じて、立て上げのついたもの、ついていないものとがあり、前者には現在の長靴状のものや爪先とかかとを別にあてたものがある。

三国時代には絹布や皮革製の立て上げのついていない各種のはき物があった。李朝時代には皮革を油に浸してつくった防水用はき物や、絹布に花の刺しゅうをほどこした花ぐつもあった。

ほかにも木製の靴や、麻、樹皮、わらでつくったはき物も

あったが、いずれもいまでは舞台の上でしか見られない。

装身具

　装身具は髪飾り、腰飾品に大別される。

　髪飾りにはリボン、トンゴッ、かんざしなどがあるが、男物より女物の種類がはるかに多く派手である。

　リボンの場合、未婚の男女は、うしろに長く編んで垂らした髪の先にやや広いリボンをつけ、既婚の婦人は、うしろまたは頭上にたばねた編み髪の下からのぞく程度に細いリボンを結び、その色は赤かえんじが選ばれた。未婚の女は赤い甲紗のリボンを、男は黒いものをつけた。

　男用髪飾りのトンゴッは、明るい光彩を放つ金、銀、琥珀（こはく）、さんご、ひすいなどでつくられた。

　既婚の婦人は古くからかんざしで髪を止めた。一般に白銅製で、金、銀、宝玉などの七宝装飾がほどこされており、金、銀、宝玉の類に美しい文様を刻み、宝石で飾ったものもある。婚礼やその他の儀式のさいは、かんざしの先に竜、鳳凰（ほうおう）を象った飾りをつけた竜かんざしもしくは鳳かんざしをさした。普通は小型を用い、儀式などで髪を大きく結ったときは大型のかんざしを使った。

　かんざしに似た髪飾り用の髪止めには花鳥や金、銀、宝石があしらってある。



チマチョゴリ

三国時代の衣服（古墳の壁画と衣服の構造品、装身具）
















짐승무늬띠고리
기원전 1세기

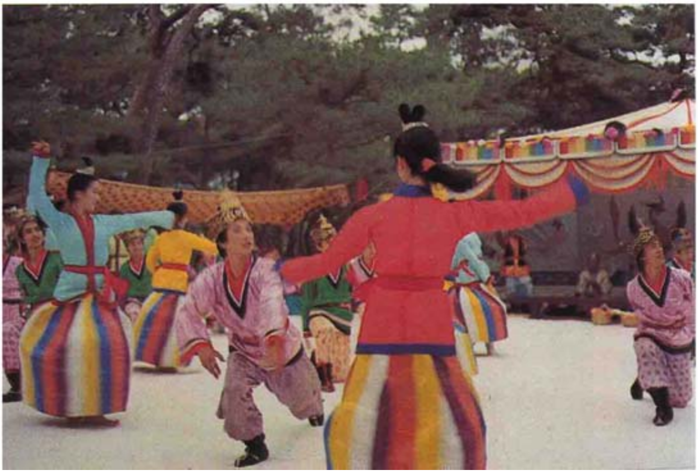
３国時代の服装
（軍人と民間人
の服装）











高麗と李朝時代の服装
（古墳と彫刻）

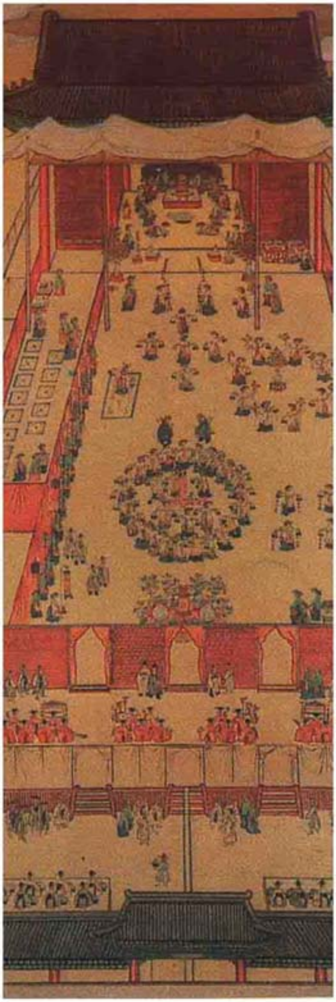












高麗と李朝時代の服装
（古画と装身具）

















今日の服装（若い娘と花嫁の衣装）











今日の服装（女性と子供の服装）







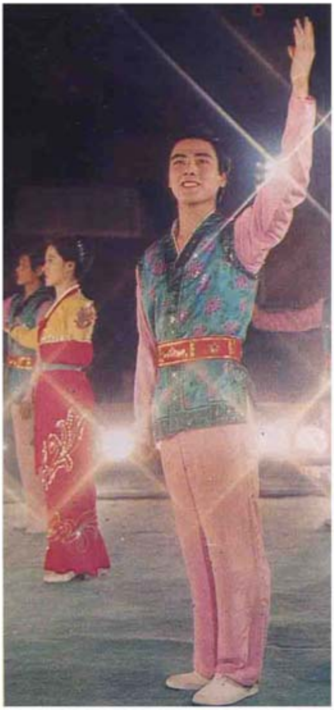




舞台衣装













耳飾りや首飾り、腕輪、指輪、装飾宝玉、装飾留具も古い伝統をもっている。

このような装身具は三国時代にとくに盛行し、現在知られている耳飾りだけでも数百種におよぶ。耳飾りは輪の部分が太いものと、細いものとがある。太いものは中空にして重さを減らしている。垂下飾りも桃形のもの、平たく延ばしたもの、角のあるものなど、とりどりである。これらの耳飾りは、細い金糸と直径１ミリメートル以下の金の粒で細工をほどこし、さらに各種の宝玉を象嵌（ぞうがん）して装飾をひきたてている。耳飾りは三国時代以後は儀式のときにだけつけるようになった。

腰部の装身具には、帯、袋、粧刀、腰飾りなどがあり、すぐれた工芸品が少なくない。

帯には　帯と腰牌（ようはい）があり、　帯は革または布製のバンドに金、銀、銅などの装飾板をつけたものであり、腰牌はバンドに吊るす飾りで、金、銀、銅、鉄、宝玉などでつくる。

袋は、最初男子がタバコもしくは詩の草稿を納めるために腰につけたが、封建社会の末期にいたっては婦人も用いた。

粧刀は男子が腰につけた装飾品で、銀粧刀、犀角（さいかく）粧刀、大粧刀、べっ甲粧刀、水牛角粧刀、紫檀（したん）粧刀、沈香粧刀など材料や形によっていろいろなものがある。装飾価値が大きくなるにつれ、婦人も小さな粧刀をさげるようになった。

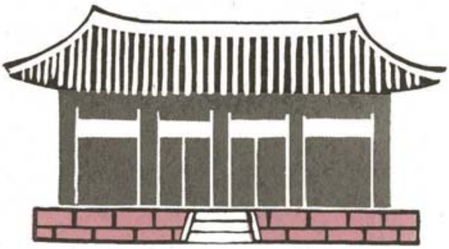
とくに婦人に愛用されたのは腰飾りである。普通は金、銀、宝玉でつくるが、形と材料によってかかし、さんご樹、玉壷、三千珠、蝶、虎の爪などさまざまの名がある。とくにすぐれているのは、麝香（じゃこう）などの香料を入れた方形または円形の玉北香であり、白玉、ひすい、さんご、金、銀などでつくられそ

の表面には唐草文（からくさもん）や花鳥が刻まれてある。それらを平素は３組、祝儀のさいは４組、５組も腰に飾った。色とりどりの華麗な刺しゅう糸にとおして細工の細いものはチョゴリの結びひもに、そうでないものは薄地のチマの裏につけて外部から透けて見えるようにした。

以上の装身具はいまでは日常生活では用いられなくなったが、来朝する外国の賓客には、健康と長寿を祈願し、また歓迎と友好団結の心をこめて銀粧刀が贈られている。

朝鮮では三つ子、四つ子が生まれれば、**金日成**主席が男の子には銀粧刀、女の子には金の指輪を贈っている。

2　家　屋



朝鮮では新石器時代に竪穴（たてあな）、半竪穴住居が家屋として形づくられ、青銅器時代にいたっては半竪穴住居から地上の住居に移行した。立体構成のうえでは、竪穴、半竪穴から地上建物へと発達し、平面構成のうえでは円形、方形、長方形の順序で発達した。

三国時代の古墳にはこれらの生き生きとした資料がある。

民家は、公共建築や楼亭建築とは異なる一連の特徴をもっている。これを平面構成と立体構成の２つの側面に分けてみることができる。

住居

住居は古来部屋づくりで、平面構成上、居室の配列によって１面型、両面型、３面型に分けられる。

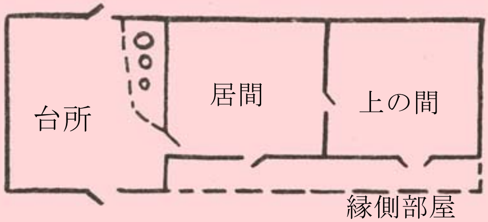
住居はまた、居室と台所をもつ母屋または内棟、一部の居室と付属施設をもつ外棟、縁側と門の有無およびその配置などによって４種に区別される。即ち、母屋だけの１字型、母屋がカギ形またはコの字形の屈折型、内棟と外棟が平行に並ぶ並列型、内棟、外棟、縁側、門が口の字形につらなる方形型である。

母屋の居室は居間、上の間、奥の間に分かれ、居間はたいてい老人の部屋、奥の間は書斎などとして使われた。

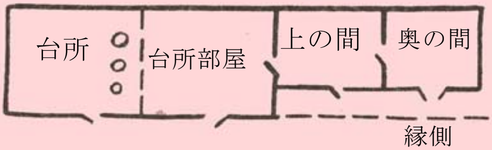
住居の平面図

1字型の住居

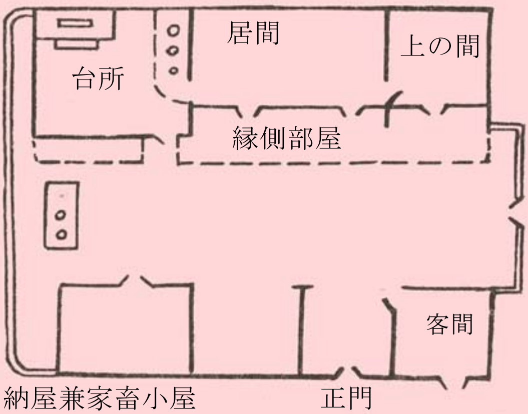
台所部屋のない1字型の住居



台所部屋のある1字型の住居

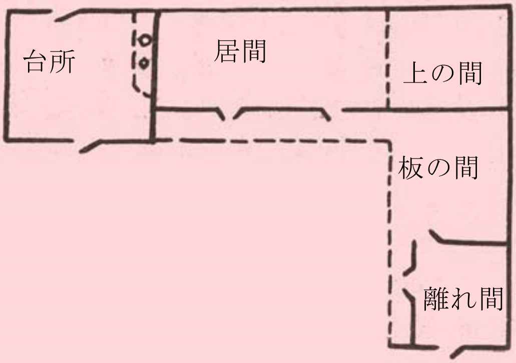


並列型の住居

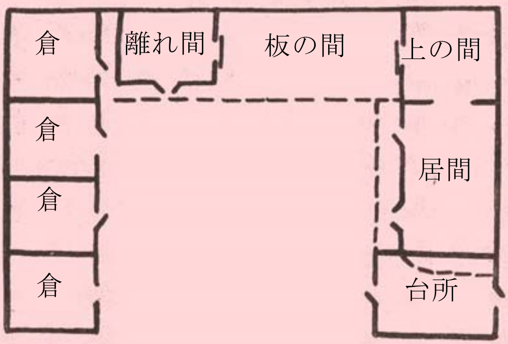


屈折型住居

カギ形住居

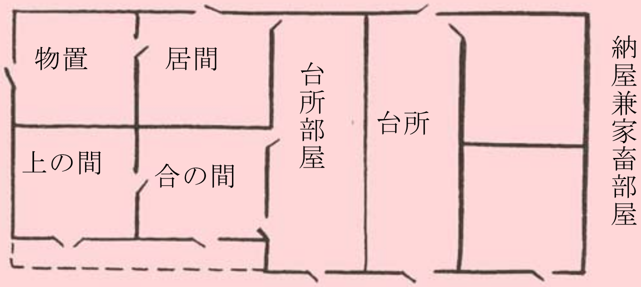


コの字形住居

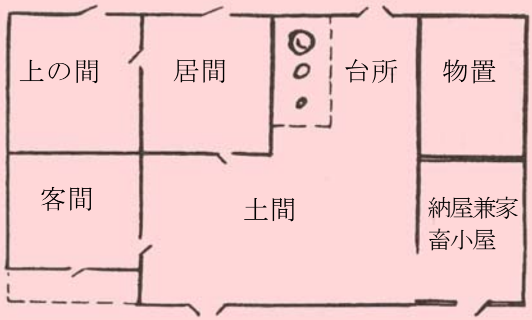


両面型の住居

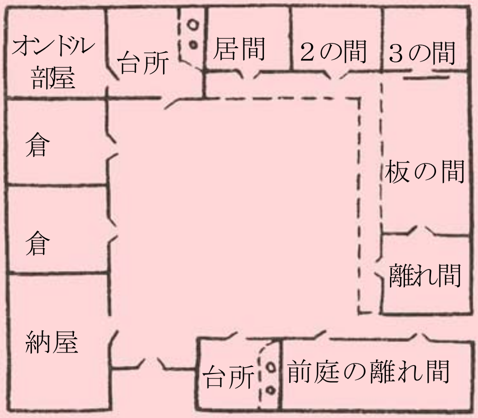
台所部屋のある両面型の住居



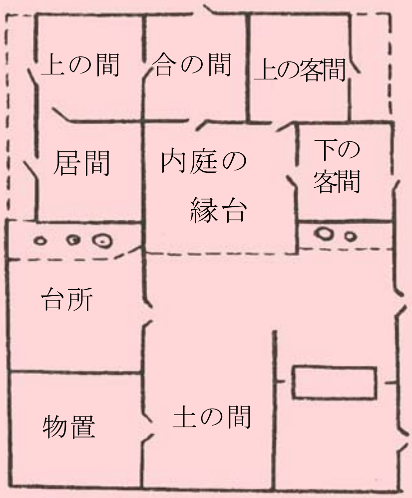
台所部屋のない両面型の住居



方形型の住居



3面型の住居



外棟には舎廊房と呼ばれる建物があり、普通、息子夫婦の使用に供された。居室はその他にも使用目的によっていろいろに区別される。

付属施設としては臼小屋、納屋その他がある。

母屋の各部屋は引き戸によって仕切られ、戸をはずせば通し部屋となる。部屋ごとに出入口があって縁側がつき、はきものを脱いで部屋にあがるようになっている。

住居の立体構成にも一連の特徴があるが、柱、屋根、壁、オンドル床、戸、丹青装飾などにそれがいちじるしい。

柱と屋根

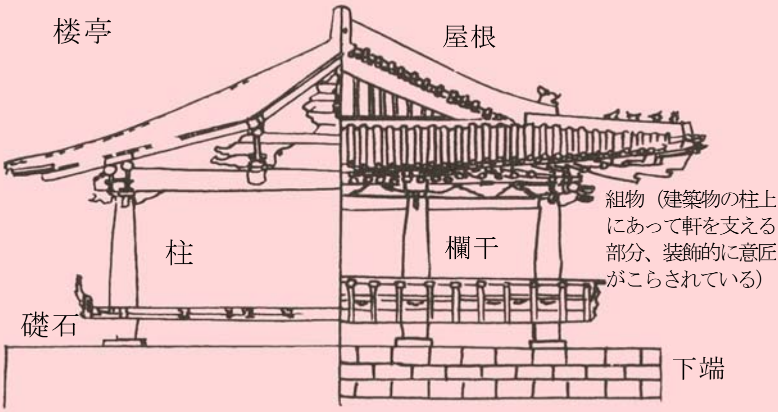
建物の敷地は地面よりやや高くして土台石を置くが、普通平たくてかたい石の角や上下両面をととのえてつかい、花崗岩とその他の石を立方体か筒形、または上円下方形に手入れして置く場合もある。

土台石の上に立てる柱には、円柱と角柱の二通りがある。

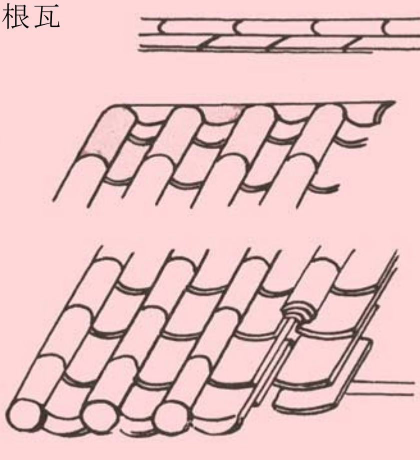
円柱は断面が均一なものと中央のふくらんだものがあり、角柱は４角柱、８角柱などがある。円柱は建物を装飾し、壮快な趣をそえる。とくに中央のふくらんだ円柱は建物の雄壮感をそそる。角柱は簡単ながらも見た目に変化をあたえている。

柱頭に置く組物は梁（はり）と桁（けた）を固定して屋根の軒を支えるために使われたが、しだいに装飾的意匠がこらされ、さまざまの彫刻をほどこした華麗なものが現れるようになった。軒の４隅を装飾する目的で組物の上に扇垂木や尾垂木を使う例もある。

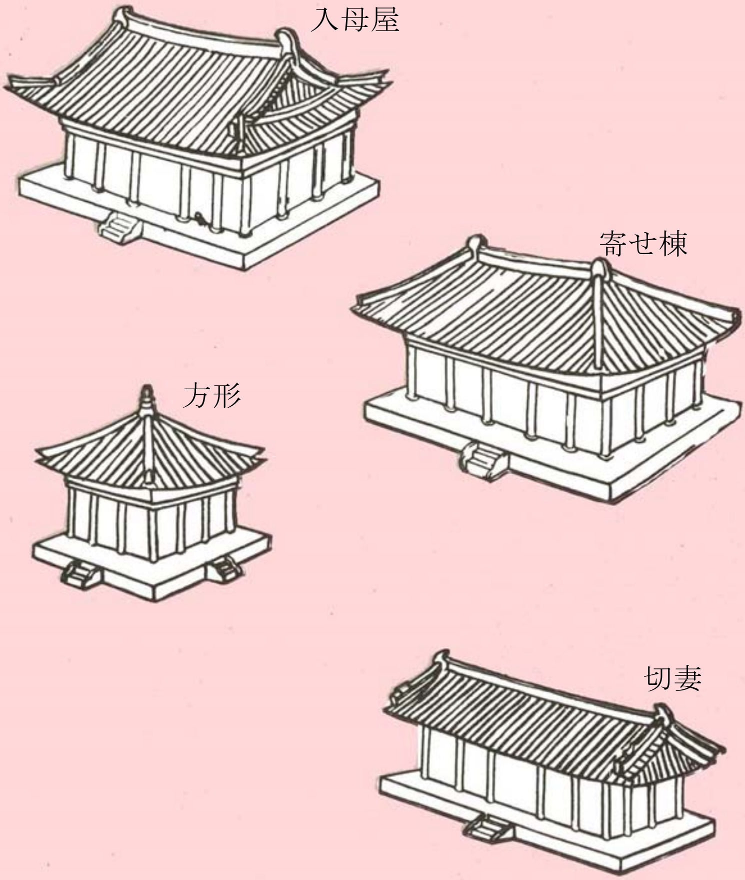
朝鮮式建築の断面図



屋根瓦

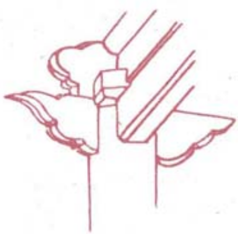


屋根の形式



組物の図

翼工式組物（頭なげしだけがあって柱上にだけおく組物）

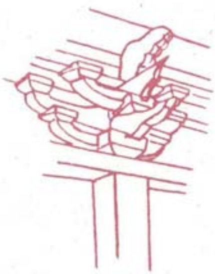


１翼工

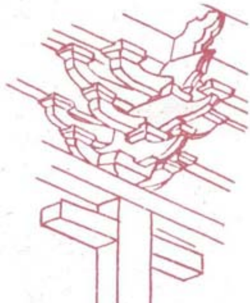


２翼工

詰め組（柱に配された組物）



３詰め組



５詰め組

朝鮮人民は、古くから屋根の構造に大きな関心を寄せ、入母屋をはじめすぐれた形式の屋根をつくっている。

朝鮮の住居は大棟をもつ屋根を基本とし、形によって切妻、寄せ棟、入母屋の３種がある。

切妻は二つの傾斜面からなり、雨水は前後にのみ流れる。寄せ棟は四つの傾斜面をもち、上に水平の大棟がある。

寄せ棟の一種に大棟を使わず屋根の中心から四つの傾斜面を出した４角屋根もある。これは亭閣に広く使われている。

切妻の上部と寄せ棟の下部を組み合わせた形式を取り入れ、しかも軒と垂木の端をぐっと上げて屋根の面に反りをうたせた入母屋は、まさに飛びたとうとする鳥の趣があり、雄壮軽快で安定した感じをいだかせる。

ふき材料としては、各種の色彩をおびた有名な朝鮮瓦が用いられている。瓦には平瓦と丸瓦があり、また軒端に当てる瓦当て、大棟の両端に用いられる鴟尾（しび）など一連の装飾瓦がある。ふき材料として天然スレートも広く使われており、昔は板瓦、わらなどもよく使用された。

壁と戸

壁は材料によって土壁、板壁、石壁の３種に分けられ、古い住居の場合はほとんどが土壁であった。

土壁はもろこしの茎や木材のこまいをわたしたのち土をこねて荒塗りを施し、その上に上塗りをして仕上げた。

母屋は南向きにして日当たりをよくしている。室内の採光は、

ガラスを使用するまでは開き戸と引き戸の障子紙をとおして導き入れたが、障子紙には上質の朝鮮紙が用いられた。

開き戸は、その内側に引き戸がつくのが普通で、昼間は開き戸をあけ放ち、引き戸だけ閉めておく。

戸の組子には古くから格別な関心が払われ、多様な格子模様や花模様などすぐれた細工がほどこされている。

部屋と部屋のあいだは障子戸で仕切られ、後壁や側壁には採光と換気用の小窓がついている。

規模の大きな門構えを大門と呼ぶが、門柱が高く屋根を入母屋式にし、軒先に尾垂木をのせて組物をおいた。

丹青

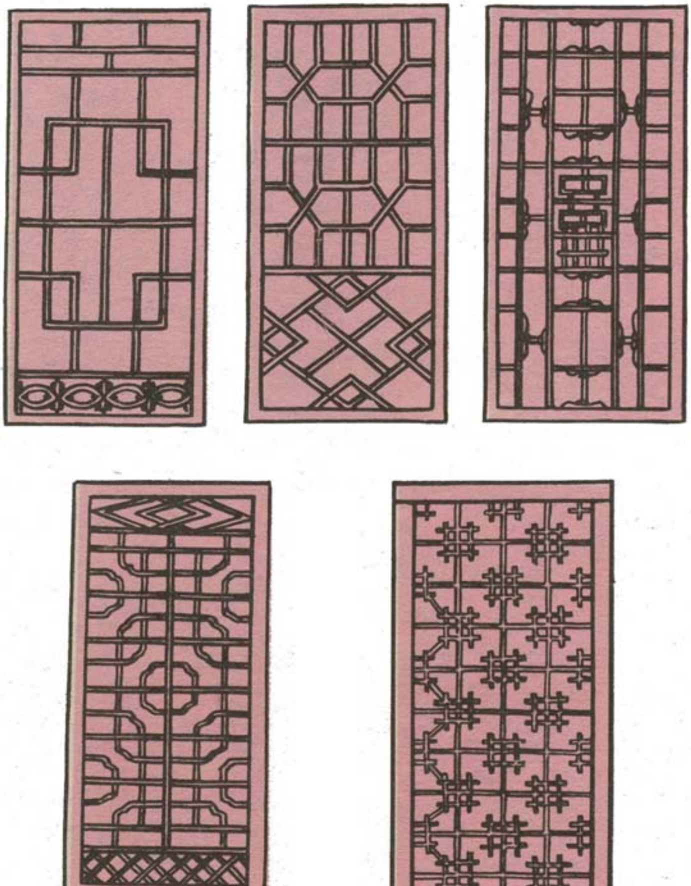
建物の木部に各種の絵や文様などの丹青をほどこして装飾し、同時に木材の腐蝕を防いでいる。丹青は建築要素によってその文様が規定されているが、実際には建物の構造、性格、用途などの違いも加わって、どれ一つとして同一のものはない。

丹青の形式は多様であっても、装飾の類型上大きく凡丹青、中丹青、錦丹青に分けられる。

凡丹青はもっとも素朴な装飾法で、普通、頭なげし、桁、組物、垂木、尾垂木などに黒の太い縞と白の細い縞模様が描かれる。凡丹青は、人の目にあまりつかない建物の背面や内側にほどこされる場合が多いが、建物に軽快感を与える特性をもっている。

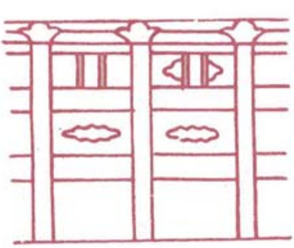
中丹青は、華麗複雑な錦丹青と単調な凡丹青の中間のもので、

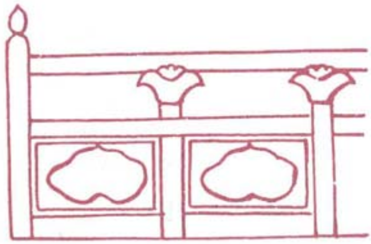
各種の格子文装飾



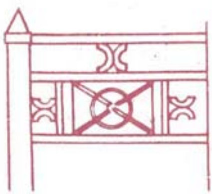
欄干裝飾

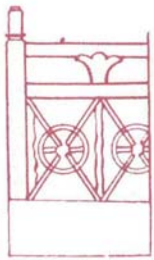
風穴裝飾



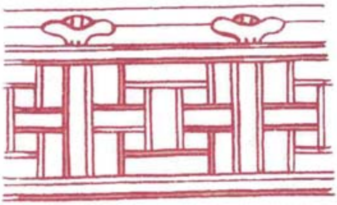


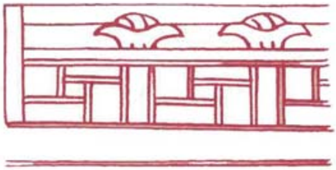
櫛目裝飾

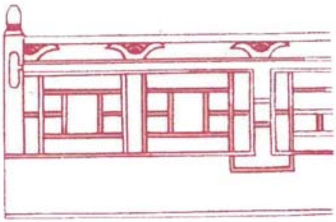


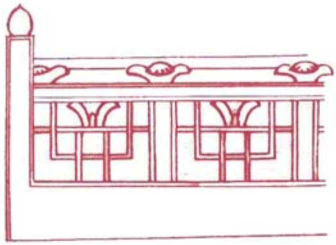


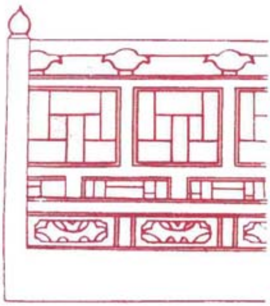
格子装飾











風穴・格子装飾

あらゆる種類の建築物に広く採用され、頭なげし、桁、梁などの両端に渦巻文、ざくろ文、鈴文、うろこ文の類がほどこされている。中丹青は建物の内と外側に同じ形式でほどこしもするが、錦丹青の建物の背面に用いる例が多い。

錦丹青は多くの面をくまなくいろどり、色彩、文様、構成が複雑をきわめ華麗である。錦丹青は、中心的建築物の人目によくつく前面にほどこすのが通例である。

色は赤、黄緑、青、黄、黒の５色を基調とし、これらに他の色を混ぜて多様な色調を出す。彩色は、まず対象の全面に淡い緑黄色を塗り、その上に図案を写して着色する。

朝鮮の丹青は一連の特徴をもっている。まず文様が多様で洗練されている。複雑、繊細な装飾も一定の原理にしたがって着色するので手間どることはない。それらは壮麗でしかも明朗かつ楽天的な雰囲気をかもしだす。また色彩が豊かで美しい。丹青は建物の外から内に、下から上に向けてより趣向がこらされ、環境との調和をはかって文様がほどこされるので、ざん新な感じをいだかせる。

オンドル

朝鮮の住居の室内暖房はオンドルによっておこなわれる。

オンドルは部屋の床下に溝を作って火坑とし、かまどからの火気を通して部屋をあたためる床面暖房装置である。上塗りした床に薄紙を何枚か張り、そこへ油をしみこませたオンドル紙を張った黄色い光沢のある床は、見るからにすがすがしく室内

を明るくする。

１６世紀、朝鮮に漂流したオランダ人ハーメルは、帰国後その漂流記のなかで朝鮮滞在中、オンドル部屋で過ごした魅惑的な印象について指摘している。

部屋の敷物には、美しい模様入りのワンゴルの花むしろや各種の座ぶとんを用い、暑い日など入口にはすだれをかけて風をとおしている。

現在都市と農村の少なからぬ住宅では、床下に温水パイプを通して部屋を暖めている。この温水オンドル方式は**金日成**主席が考案したもので、朝鮮固有の暖房法を近代的高層アパートに適用したユニークな方式である。朝鮮人の好みと生活慣習を考慮して、部屋の上座をより暖かくして老人が座を占め、下座は若い人たちが座るように工夫されてある。

部屋の作りも固有な生活様式を取り入れて、床に座って生活できるよう床にオンドル紙を張り、はきものを脱いで入るようになっている。そして部屋ごとに違った色彩の模様入り壁紙と天井紙を張り、民族固有の色調と現代的センスを生かして装飾上の調和をはかっている。

家具

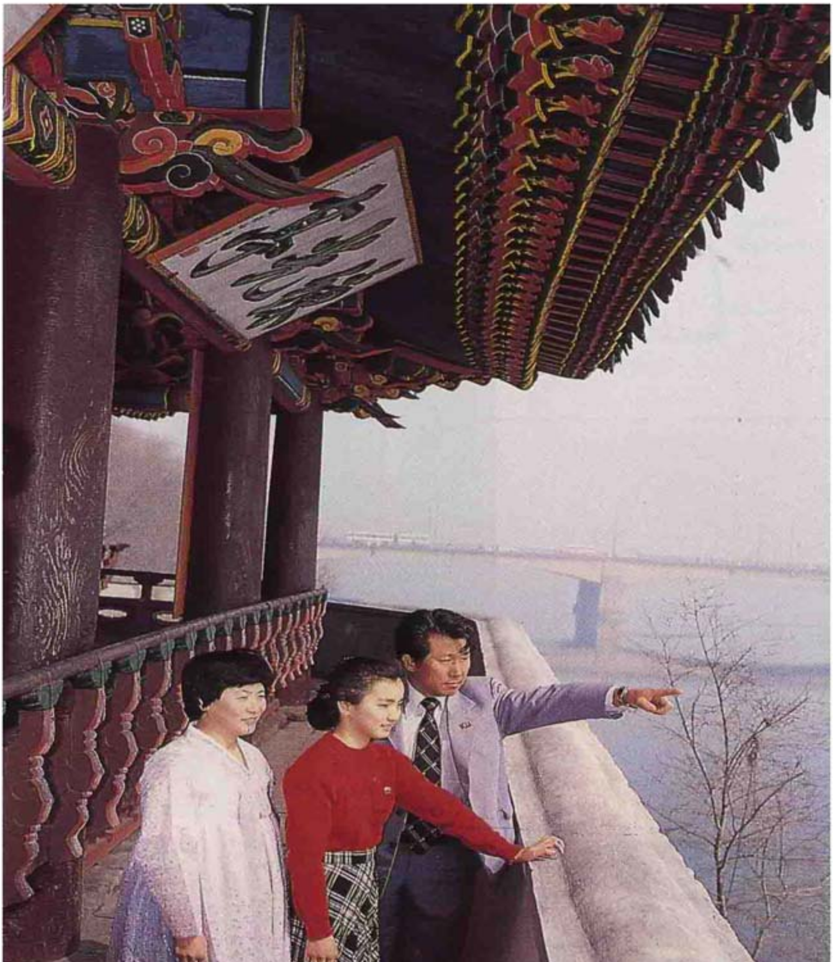
部屋には螺鈿（らでん）の衣装だんすや布団だんすを配し、その側に家財を入れる押入れがある。

螺鈿あるいは黄銅、白銅で装飾したたんすや長持ちは部屋を明るく飾っている。

壁には書画の掛軸がかかり、こざっぱりした敷物の上には種々の文具が置かれた螺鈿漆細工の座机がある。
部屋の背面にめぐらした絵入りの屏風は、床しい情趣をかもしだしている。
部屋の下座には骨董品や植木鉢がおかれ芳香を放っている。

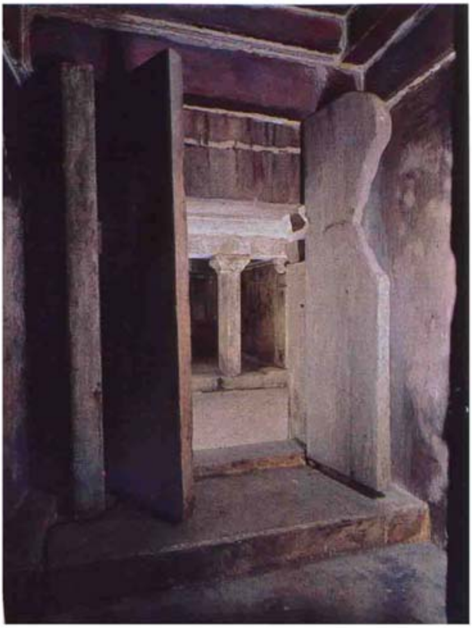
庭

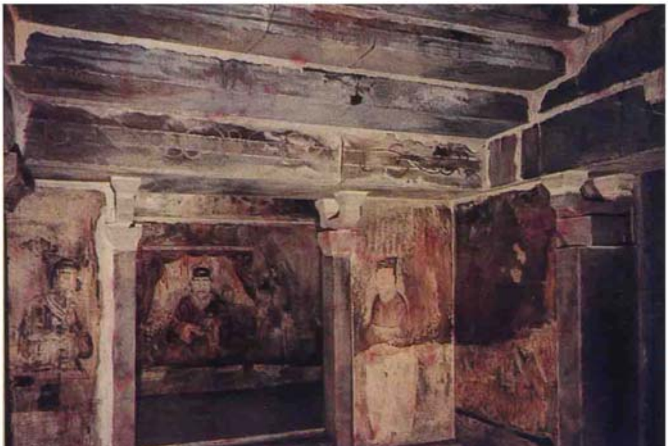
庭は内庭と外庭に分けられる。前者は建物に囲まれているため居間の一部といった感じであり、またそのように使われる。内庭には井戸と醤油がめや味噌がめを置いた台があり、花壇も配されている。地方によっては長い石台を1、2段つくって植木鉢を置く。
外庭には果樹や花の植木がある。庭の垣根にもまた木を植えているので住宅は青々と緑につつまれている。概して内庭は居間のような趣を呈し、外庭は果樹園や森を思わせる憩いの場の感じを与えている。
井戸は庭や戸外にもある。朝鮮人民は昔からまず井戸の位置を基準にして家屋の敷地を定めたという。井戸は水の汲み方によってつるべ井戸、はねつるべ井戸、涌き水場と呼ばれ、井戸端にも木を植えて風致をそえた。
また農家には門の脇に農具や穀物を保管する納屋や家畜小屋があった。
朝鮮の伝統的な建築様式は、農家や都市の劇場、会館、学習堂、食堂など文化施設や便益施設の建物に広く取り入れられている。

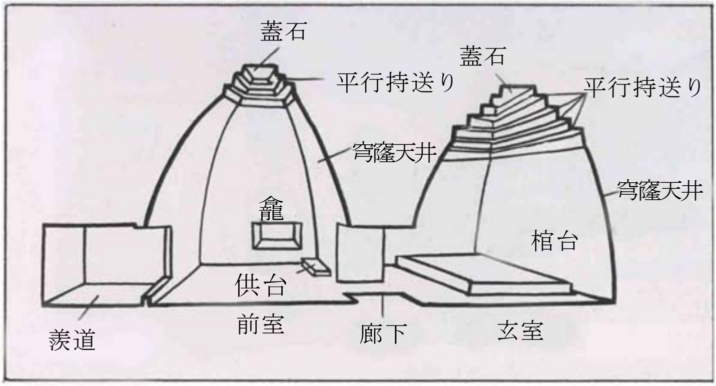


平壌の練光亭

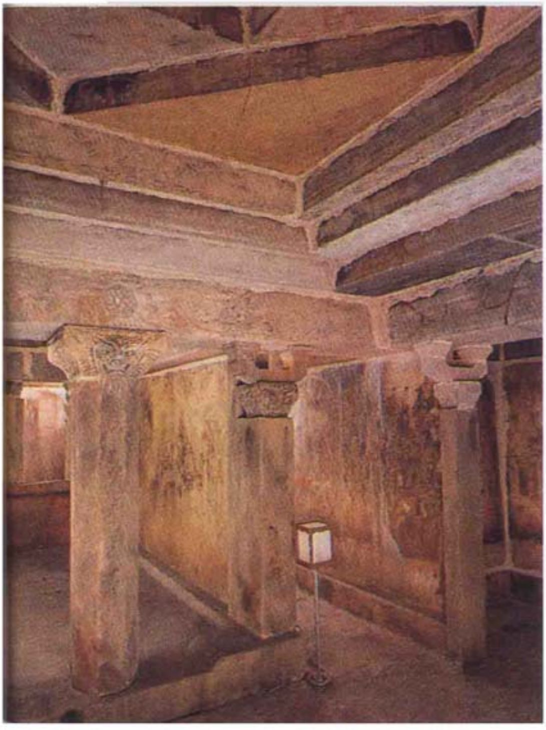
高句麗時代の古墳は朝鮮式家屋の資料を提供している







墓室の図





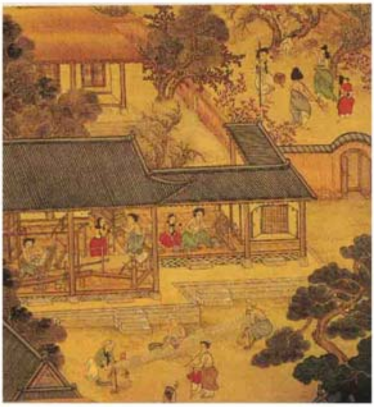
昔の朝鮮の家屋









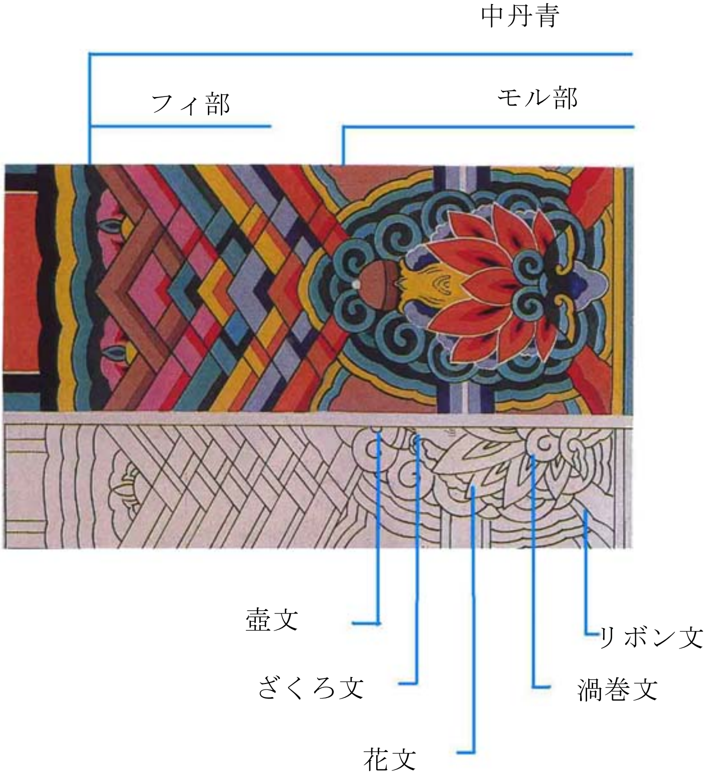


平壌城の清流亭と普通門



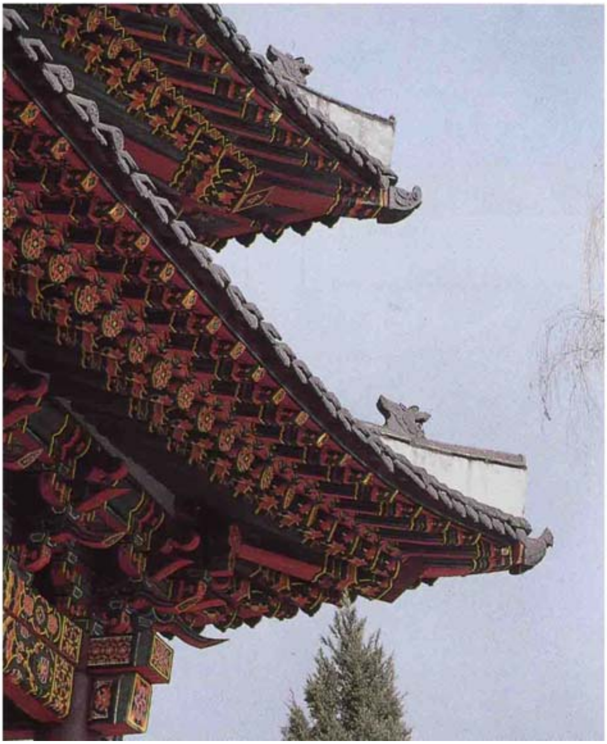


中丹青の図



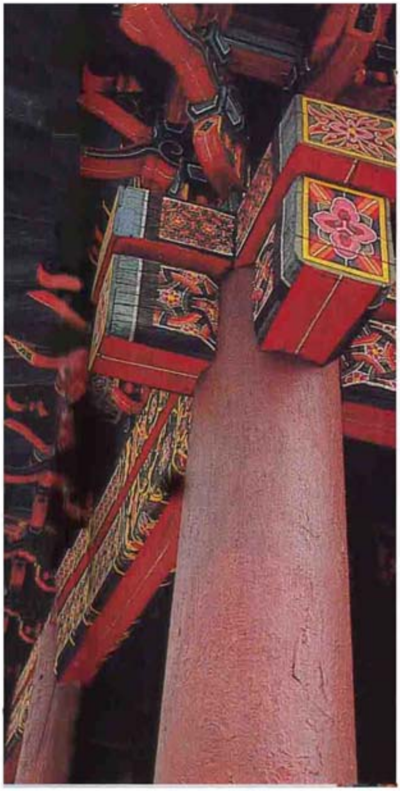
中丹青とは、建築部材の両端部にほどこす図案化された丹青文様で、モルとフィからなる。モルはその文様によって杖鼓モル、瓶モル、壷モル、渦巻モルなどに、フィは榧フィ、鱗フィ、波フィなどに分けられる





組物の装飾的意義が大きくなるにつれて華やかさを加え、とりどりの彫刻がほどこされた

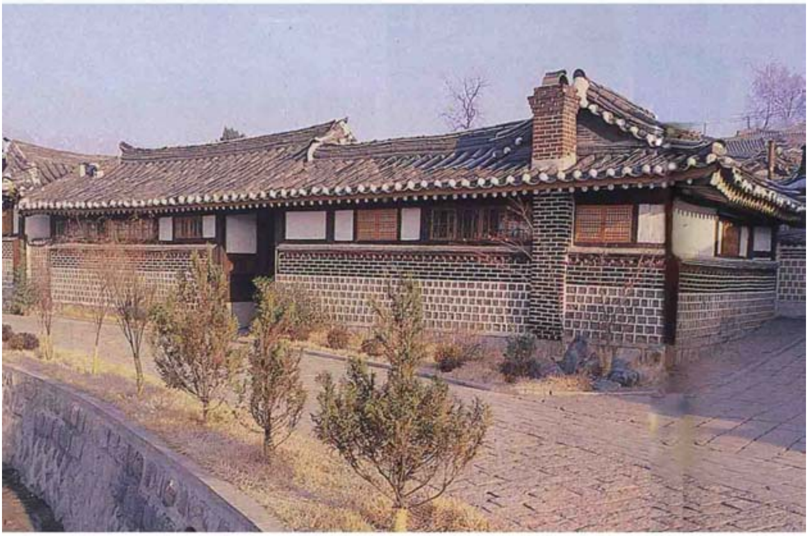






昔の朝鮮の家屋
（開城民俗旅館）





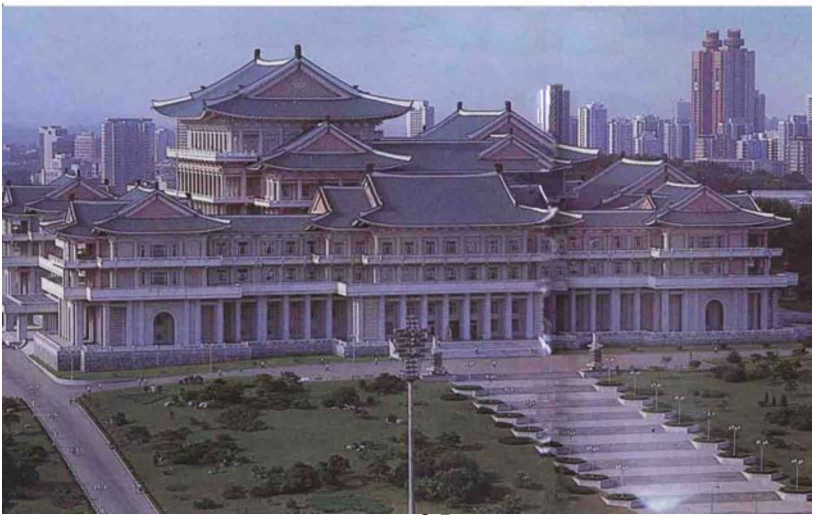






現在の朝鮮式家屋
（公共建物）

















近代的な建築物にも伝統的な建築様式が部分や要所に巧みに取り入れられている



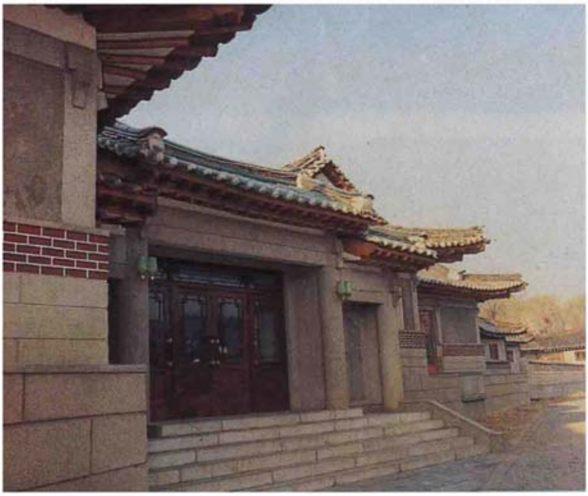






今日の住宅





首都平壌にある壮大な人民大学習堂と人民文化宮殿、平壌大劇場と玉流館、リョンモッ閣、牡丹閣などの建物や大城山革命烈士陵の大門、妙香山麓の国際親善展覧館をはじめ多くの記念碑的建築物の柱、屋根、扉の組子、欄干、丹青装飾などには、古来の伝統と新しい趣向が生かされている。

チュチェ思想塔や凱旋門などの記念碑や多くの近代的建造物にも伝統的な建築様式が要所に巧みにもりこまれ、深い印象を与えている。

3　食　物



朝鮮では遠い昔から民族固有の食物がつくられ、発展している。

紀元前 3,000～2,000 年紀に早くも粟やきび、もろこし、大豆、小豆などを植え、各種の家畜を飼っている。

古くから味噌・醤油や酒などの醸造法が発達し、焼き物、干し物、塩辛など各種の副食物を調理し、蜂蜜や油を料理にさかんに使った。

草餅、ホワジョン（花煎)、水団、ソンピョン（松餅）など特色ある餅類や薬飯、油蜜菓その他の高級料理がつくられ、胡椒（こしょう）をはじめ各種の調味料が利用されている。

主　食

朝鮮料理の主食は、飯、餅、めん類、かゆ、チジム（穀粉を溶いて、熱した鉄板の上で焼いたもの)、ムク（緑豆、そば、とうもろこしなどの澱粉を煮て冷やした寒天状のもの）などである。

飯は白米、粟、麦、きび、もろこしなどでつくる。朝鮮では昔から米飯をちさ、干しのり、しらやまぎくで包んで食べる風習がある。

飯には五穀飯、薬飯、まぜ飯もある。

五穀飯は小正月に食べる習わしで、新年にも五穀が豊かに実るようにという願いをこめて炊いたという。

薬飯は、蜜煮にした栗、なつめ、松の実、くるみなどをごま油といっしょにもち米と混ぜて蒸したものである。

まぜ飯は、いためたり焼いたり、なますにしたりした肉やあえた野菜を飯と混ぜ合わせたものである。

かゆもとりどりで、穀物でつくったものやいろいろな材料を混ぜたものがある。穀物がゆで代表的なものは米がゆ、緑豆がゆ、小豆がゆで、そのほかにあんずの種や松の実でつくったかゆ、栗がゆ、魚がゆなどがある。

めん類は有名な主食の一つで、小麦粉、そば粉、じゃがいも粉、とうもろこし粉などを材料としている。小麦粉のめん類は南部の小麦の産地でよく食膳にのせられる。めん類ではとくにそばが好まれ、これを使った平壌冷めんはしこしこと歯ごたえがあり、出し汁はさっぱりとして甘ずっぱいのが持ち味である。出し汁の種はきじ肉が最適で、牛肉、鶏肉も好ましい。

料理の仕方によって温めん、冷めん、まぜそば、盆そばなどがある。温めん、冷めんは、それぞれ独特の風味をもつ。

まぜそばは、ごま油をしみこませたそばに加薬を混ぜ、盆そばは、やはりごま油を使ったそばを真鍮の盆に盛って加薬を添える。

朝鮮では昔から夏はきじ肉、卵焼き、薄切りの梨やきゅうりなどの加薬に調味料をほどこし、氷を入れた冷めんが喜ばれ、冬は肉にいろいろな薬味を加えた温めんが好まれた。

朝鮮人民の好物の餅は、材料と製法によって 50 余種にのぼ

る。餅は米のまま、もしくは粉にしていろいろとつくられるが、前者の代表的なものはチャルトクである。これはもち米を蒸して粒がなくなるまでよくつき、適当な大きさに切って黄な粉をまぶすのである。まぶす材料としては大豆のほかに小豆、緑豆、ごま、蜂蜜が用いられ、ときにはなつめ、栗、ほし柿、松の実および岩たけ、花粉も使われる。

米を粉にしてつくる餅には、まずソンピョン（松餅）がある。これは、うるち米の粉を熱湯でこねてあんを包み、半月形、貝殻形などにつくってから松葉を敷いて蒸すが、松葉の移り香が香ばしい。なつめ、栗、ごま、枝豆の実、小豆などがあんになる。

粉を熱湯でこね発酵させたのちつくる餅もあるが、代表的なのはチュンピョン（蒸餅）で、上にのせる加薬がその味を左右する。昔は縁起祝いの文字をなつめであらわしたという。

このほか、うるちまたはもち米の粉を湿らせて、こしきで蒸すシルトク（甑餅）、練り粉を蒸してつくヒントク（白餅）、練り粉を丸めてゆでるキョンダン（団子）類、またとりどりの形にこねて油で焼くか揚げるホワジョン（花煎）やチュアクなどもある。

チジムとムクも材料やつくり方によってさまざまである。

麦芽を入れて甘味をつけた平壌地方のノティ（もろこしチジム）、海州地方の香ばしい緑豆チジムと、開城地方のさっぱりした緑豆ムクなども古くから好まれている。

副食物

副食物は、汁、煮物、鍋物、煮つめ、キムチ、野菜あえ、蒸し物、いため物、串焼、あぶり物、煮しめ、細切れ肉、なます、脯（ほ）（肉や魚の干し物）、塩辛に大別される。

汁は主として朝食と夕食に温かいものをとるが、夏は冷たい汁もつくる。具としては野菜、肉、魚、山菜などが使われる。

汁より具が多く、水が少ししか入っていないものにチジゲ、タン、コウムがある。

タン（湯―鍋物）には1種類の具を使うヤンタン、数種をごった煮にするチャプタン（雑湯）、各種の具を並べて煮るヨルグジャタン（悦口子湯―寄せ鍋）つまり神仙炉がある。

有名な神仙炉は、もともとヨルグジャタン用の独特な構造をもつ鍋の名であるが、それが料理名となったのである。きじ肉、鶏肉、牛肉、、牛の臓物、豚肉、あわび、えび、なまこ、ねぎ、せり、たけのこ、わらび、松たけ、かんぴょう、ききょうの根、卵、栗、なつめ、ぎんなん、松の実など 30 余種の具を使う。これらの具に小麦粉あるいは卵の衣をかけ、炭火を起こした神仙炉で煮るのである。コウムとしては牛の胃、鶏、鯉のコウムがよく知られている。これはつぼに入れて長時間煮つめ柔らかくなった肉を食べたり、その煮汁を飲む料理である。

朝鮮でもっとも一般化した固有な副食物の一つにキムチ（漬け物）がある。白菜、大根などの野菜や山菜に塩をふり、にんにく、ねぎ、とうがらし、果物、塩辛などを混ぜるが、乳酸その他の有機酸が発酵して独特な風味と香気をもつ。数十種にの

ぼるキムチを大別すると、冬越し用と、春、夏、秋の早漬けに分けることができる。大豆を材料とする副食物には、豆腐、豆もやしなどがある。

つぎは焼き物で、その代表的なものに焼き肉と串焼がある。

焼き物は肉や魚に調味料と薬味をつけてあぶるが、牛肉が喜ばれている。ききょうやつるにんじんの根をあぶることもある。

串焼きにする肉の薬味にはねぎやきのこを混ぜ、ねぎ串、きのこ串などと称する。とくに牛肉をみじん切りにして調味料と薬味をほどこし、ごま油をぬった紙で包んで串焼きにしたのは、珍味とされている。

あえ物も人民の食膳をにぎわす副食物の一つである。さっとゆでた野菜やその他の材料に調味料と薬味を混ぜあわせたもので、いろいろな野菜を別々に調理したものや雑菜、魚菜など多種多様である。この他に、肉を煮しめたり、油でいりつけたり、蒸したりしたものもある。

チムという料理法には３種がある。鮮魚や鶏を丸ごと金属製の盆にのせて蒸す方法や、牛のばら肉チム、かにチムのように、ぶつ切りにした材料を汁がほとんどなくなるまで煮こむ方法、いまひとつはなまこチム、はまぐりチム、あわびチムのように薄く切った材料を牛汁に入れて煮る方法がある。

つぎはなますで、これは肉類、魚介類を生のままかさっとゆでて刻み、千切りにした春菊、大根、梨などと一緒に二杯酢またはとうがらし味噌酢であえるのである。

朝鮮では、肉や魚を薄く切って干した脯が古くからさかんに用いられた。材料によって魚脯、肉脯、雉脯、鹿脯などがある。



古来の製法で作られている餅とそばは人気がある

















チジム





薬味で病気の治療
に薬効のある緑豆
チジム

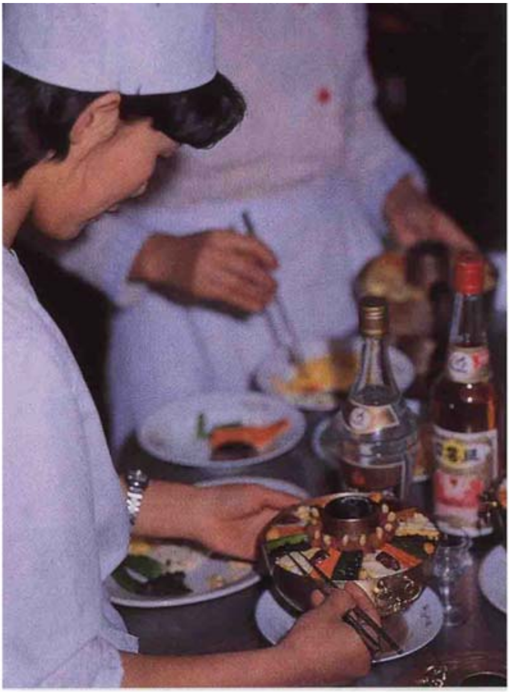




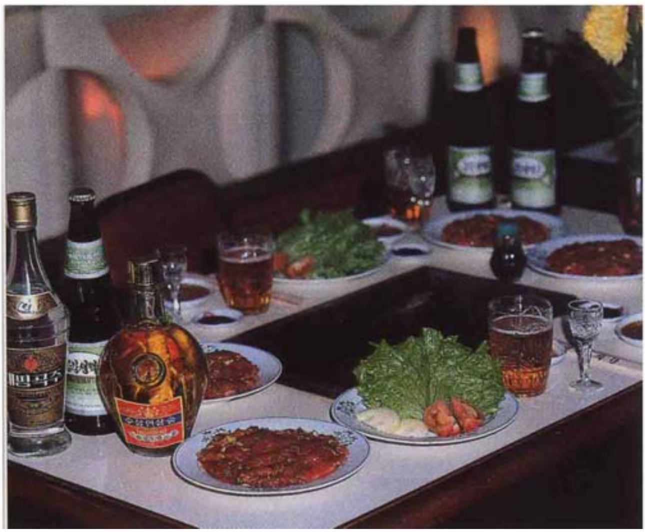


神仙炉





固有の朝鮮
料理—神仙
炉と焼肉
















魚肉菜



イカのいためものとカムルチのなます

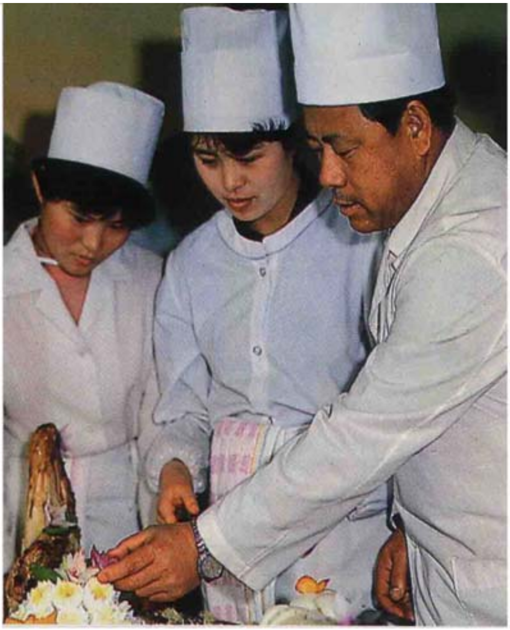




７香の蒸し鶏（７種の調味料と独特な香料を加えて鶏を蒸したもの）

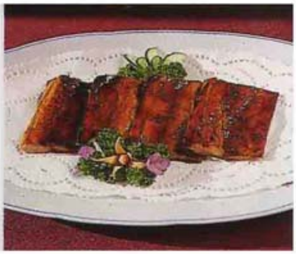


伝統的な調理法は広く伝授されている







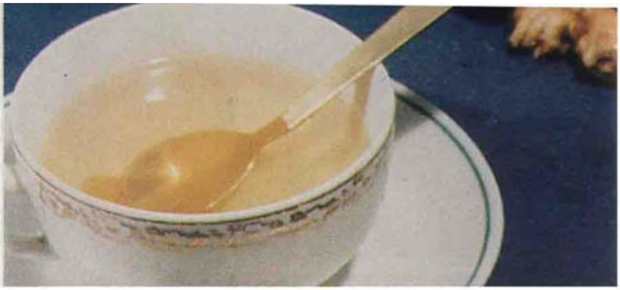









朝鮮古来の菓子類と飲み物
も喜ばれている













製法も、塩をふった塩脯、塩と胡椒をふった散脯、薬味醤油にひたしてあぶり、たたきほぐしてからまた薬味醤油にひたす工程をくりかえす醤脯、みじんに刻んだ肉に味つけをして四角形に干した片脯、肉を塩漬けにし蜂蜜と薬味醤油を塗って干した薬脯など、さまざまである。

なかでも滋養分に富み、食欲をそそるのは牛肉、いか類の片脯である。脯は味もよいが保存がきくので重宝がられている。

塩辛は魚介類やその卵でつくるが、はまぐり、小えび、ほたるいか、かきの塩辛がよく知られている。塩辛は副食物としてばかりでなく、漬け物の調味料にも利用されている。

菓子類

朝鮮で古くから伝わる代表的な菓子類は飴、油蜜菓、ヨッカンジョン、茶食菓、熟実菓、正菓などである。

穀物を原料とする飴には水飴と固飴がある。

固飴は主原料と副原料によってもち米飴、もろこし飴、粟飴、きび飴、かたくり飴、とうもろこし飴、落花生飴、くるみ飴、ごま飴、松の実飴などに分かれ、水飴は食物の加工に用いられる。

小麦粉、蜂蜜、油を主材料とする油密菓には薬菓とカンジョン（おこし）の２種がある。

薬菓は小麦粉を蜂蜜と油でこねて揚げ、蜂蜜にひたしたものであり、他方もちを乾かして油で揚げ、水飴あるいは蜂蜜を塗ったあと、炒り種、松の実、ごまをまぶしたのがカンジョンである。

ヨッカンジョン、茶食菓、正菓、熟実菓はその材料を蜂蜜で

こねて一定の形につくった菓子である。

ヨッカンジョンは、大豆やくるみ、松の実、落花生、ごまなどを蜂蜜で固めて平たくのばし、適当な大きさに切ったものである。

茶食菓は、じゃがいもの澱粉、もち米、松の花粉、当帰、甘栗などの粉を蜂蜜でこね、模様つきの型にとった菓子である。

正菓は高麗人参、ほし柿、なつめ、栗などを蜂蜜か水飴で煮つめたものであり、熟実菓は栗、なつめ、しょうがなどを煮つぶして桂皮粉と蜂蜜でこね、元の形につくって松の実の粉をまぶしたもので、それぞれ栗卵、棗卵、 姜卵という。

飲み物

朝鮮には古来、各種の酒や清涼飲料がある。

酒類のうち穀物を原料とする酒には、アルコール分の弱い薬酒と濁酒、そしてアルコール分の強い焼酎がある。

もち米でつくられる薬酒は、透明でアルコール分が適当なので儀式や行事に用いられ、昔から有名である。口当たりのよい濁酒は清涼飲料としても喜ばれている。アルコール分の高い焼酎には、醸造法と薬剤の配合によって地方の特色を生かした各種の銘酒が多い。

とくに有名なのは平壌一帯の甘紅露、平安南道一帯の碧香酒、黄海道一帯の梨姜膏、開城地方の高麗人参酒である。

平壌産の甘紅露は甘味と辛味が調和した独特の風味をもつ。梨姜膏はしょうがとずみの搾り汁を焼酎に加えて加工し、また竹瀝膏は、真竹を火にあぶってだした液としょうが汁を加えた

酒である。

蛇酒は、毒蛇を水につけて胃の中の物を吐きださせたあと、酒にひたし毒を溶かしてつくる。高血圧や関節炎、泌尿器系疾患の治療に特効がある。

このほか桂皮、高麗人参、果物などを利用した独特な香りと味をもつ酒類もある。

清涼飲料には、花菜、水正果、シクヘ、甘酒などがある。

花菜は、薄切りにして蜂蜜に漬けた果物を五味子液もしくは蜂蜜液に入れ、松の実と氷を浮かべた夏向きの飲み物である。

水正果は、しょうがと蜂蜜を煮たてた液に干し柿と桂皮粉をあしらい、松の実を浮かべたものである。ほし柿のかわりに梨、桃、ざくろ、みかんなども使う。水正果は冷たい飲み物であるが、香り高くやや辛みのあるさわやかな味覚から正月用のものとされている。

シクヘは麦芽粉を温湯で処理した液に米飯を仕こんで発酵させたもので、水正果と同様冬の飲み物である。

シクヘに似た甘酒は西北朝鮮地方の名物である。

このような朝鮮の伝統的な飲食物は、今日の食生活にも広くとり入れられている。

食品加工業のめざましい発展にともない、これらの飲食物がより多様に工業的方法で生産され、人民の食生活をうるおしている。

4　競技と遊戯



朝鮮の民俗競技と遊戯は長い歴史をもち、すでに三国時代に多様な発展を遂げた。

その一端は高句麗古墳の壁画にうかがえるが、相撲の場面は角抵塚の名で知られる古墳の壁画に、手搏戯という力くらべの場面は安岳第３号墳の壁画に、騎射図は徳興里壁画古墳などに描かれている。

このほかにも馬上才という馬術競技や馬を駆って毬を打つ撃毬が知られている。

高句麗では毎年春、平壌の楽浪丘で狩猟競技を催したが、ここで名を馳せたという温達の故事は今日に伝わっている。

今日朝鮮人民は古くから伝わる民俗競技や遊戯を生かし、祝日や休日にはそれらを楽しんでいる。

弓　術

昔朝鮮には山村にも「　堂」があって、そこで青少年たちの弓術や馬術などが競われた。南浦市江西区域徳興里の高句麗壁画古墳には、４人の射手が馬を駆りながら５本の杭に立てた標的を射止める場面が描かれている。そこには２人の審判と記録係の姿もみられ、競技が厳格なルールに従って進められたことをうかがわせている。

弓を射る競技は２組に別れておこなわれた。各組の射手がそれぞれ５本の矢を射て１回とし、３～５回の競技を経たのち、射当てた矢の総数によって勝負を決めた。

弓術競技をおこなう日には多くの観衆が集まって、楽しく歌い踊った。

選手たちは矢を腰にさし、弓をつかんだ手をふとももにつけ、厳粛な足どりで順ぐりに射場へむかう。楽隊は角笛などの楽器で歓迎曲を奏で、選手が標的に３本の矢を射当てると、勝ち組は『チファジャ』歌をうたい歓声をあげた。

優勝者には当年の「壮元」の称号と賞品を授けた。負け組は「マンジ」と呼ばれ競技の経費を負担するならわしであった。

弓術は今日も人民のあいだで盛んにおこなわれる競技の一つとなっている。現在おこなわれている弓術には、男女個人競技と３～６人を１組とする団体競技などがある。男子競技種目の射距離は 90、70、50、30 メートルであり、女子の競技種目のそれは 70、60、50、30 メートルとなっている。

出場者は１種目に 36 本、合計 144 本の矢を射ることになるが、各種目を２度くりかえして高い方の点数をその種目の得点とし４種目の合計を総合得点とする。

相　撲

朝鮮相撲は古くから伝わる民俗競技の一つである。

朝鮮相撲は、サッパ（腰と太ももに巻く布）をつけた２人が各自右手は相手の腰のサッパを、左手は太もものサッパをつか

んで相手を倒す競技である。

激しい闘志と敏捷な動作、巧みなわざを養う相撲は、毎年春と夏、秋に全国でおこなわれた。

相撲は今日も祝日などに首都や地方でおこなわれ、人々を楽しませている。競技は体重別（60kg 以下級、70kg 以下級、80 kg 以下級、80 kg 以上級、無差別級）にわかれて優勝が争われる。競技者は直径 10 メートルの土俵で赤色と青色のサッパをそれぞれ右の太ももにつけ、ルールに従って力とわざを競う。この競技は５分間たたかって３分間休み、3 回戦をおこなうことになっている。これには個人競技、団体競技および体重に制限のない実力競技がある。実力競技の優勝者には花輪を首にかけた雄牛を賞として与え、第２位以下は豚、やぎなどの家畜が与えられる。

綱引き

綱引きは、長い伝統をもつ団体競技である。大勢の競技者によって争われるので、とくに綱の製作に念が入れられている。

中央線の左右５、６メートルの位置に決勝線があり、相手側をそこまで引きずって来れば勝敗が決まる。

綱引きは 1 本の綱によって全競技者の力と心を一つにまとめるすぐれた競技である。

かつて陰暦の正月には 1 日から 15 日までの間に競技がおこなわれた。幕開きに 12、13 歳、14、15 歳の少年の綱引きがおこなわれ、「子ども綱」といわれた。最終日（15 日）には大綱

引きの決勝戦がたたかわれた。当日は近隣数か村の老若男女数千人が集まって、歌い踊り、応援をした。
綱引きは今日でも民俗競技の呼び物の一つとなっている。
20〜40 人が 1 組になって、真ん中に赤い布で目印をした綱の両端を渾身の力をふりしぼって引きあう情景はみものである。
綱引きでは出場者が力を一つにまとめることがとりわけ大切である。競技が始まれば、出場者はもとより見物人も呼吸を合わせ、声を揃えてかけ声をかける。綱引きほど、出場者と見物人が呼吸と声を一つに合わせ、熱狂的に勝負を競う競技は珍しい。
綱引きは幼稚園や学校、遊園地、競技場などでおこなわれ、人民の楽天的な生活をいっそう明るくしている。

ブランコ、板とび

朝鮮には古くから女性の競技も多く、ブランコと板とびは代表的な競技である。
ブランコ競技にはさまざまな判定法がある。ブランコの前方、高いところに鈴を吊るしてそれを蹴る方法や、踏み板の下に目盛を記した綱をつけて高さを計る方法などである。
ブランコ競技は祝日に全国でおこなわれた。
16 世紀の女流詩人許蘭雪軒は詩『ブランコの歌』でつぎのように詠んだ。

村の娘たち
わざを競って

ブランコにのる
腰に帯しめ鉢巻きをして
空高く舞いあがる

彩色綱　風を切って
宙におよぎ
玉佩の音に
柳の葉　あだに散る

現在のブランコは、柱の高さが 11 メートル、2 本の柱の間隔は上部 2 メートル、底部 3.5 メートルで、上部には 2 本の横木をあてている。鈴を吊るした柱には目盛が刻んである。

ブランコ競技は、出場者の水準によって吊るした鈴の高さを 1 メートル、50 センチメートル、20 センチメートルずつ引き上げて勝負を争う。出場者は所定の高さで 2 回まで試みることができるが、2 回とも鈴を蹴ることができなければ、出場資格を失う。短時間内に、少ない回数でもっとも高い位置の鈴を蹴鳴らした順序によって順位が決まる。

板とびも婦人に好まれる競技の一つで、広くおこなわれていた。

古くから正月に板とびをすると、その年は足の裏をとげにさされないと言われている。祝日には娘たちや若い主婦たちはもとより、少女や中年婦人も晴れ着を着飾って美しい姿態やわざを競った。

板とびの技巧には、空中で宙がえりをするもの、両足を前後

または左右に大きく振るもの、上半身を後ろに反らすもの、その他の芸当をおこない、民謡に合わせてリズミカルな動作をするものなど、とりどりである。

板とび競技には垂直とび、位置変えとび、わざとびなどがあり、競技時間は２分である。

垂直とびは、２人が出場し、２分間に平均 2.3 メートル以上跳んだときに基準点 10 点を与え、それ以下の場合は一定の点数をさし引く。

位置変えとびは、４人の出場者が１組２人ずつわかれて、互いに位置をかえながら高く跳ぶわざを競うのであるが、２分間に平均２メートル以上をとび、24 回以上位置をかえたときに 10 点を与え、それ以下の場合はその回数によって点数をさし引く。

わざとびは、扇、小鼓、手拭、リボン、輪などの小道具を使ってわざを競うのであるが、２分間に平均 1.5 メートルをとんだときの基準点は３点、わざをかけた回数にたいする基準点は５点、技巧にたいする基準点は２点で、基準点に達しないときは一定の点数をさし引く。

個人戦、団体戦、個人・団体戦があり、所定の時間をとびつづけることができなかったとき、片足あるいは両足が地面にふれたとき、動作が中断されたり体の均衡が失われたりしたとき、小道具を落としたときは、その程度によって点数をさし引く。

板は長さ 4.5～5 メートル、幅 35～40 センチメートルの弾力に富む木材を使い、板の中心を支える台の高さは 30～35 センチメートルである。

平壌サーカス団の板とびは、高度の技量と民族的情緒を見事

に調和させて人気を呼んでいるが、外国公演でも絶賛を浴びている。

将棋、ユッ遊び、コヌ

将棋は、古くから人民に愛好されてきた大衆的競技の一つである。

『於于野談』という古書には、将棋天狗の高官が農夫に惨敗して恥をかいた話が収録されている。

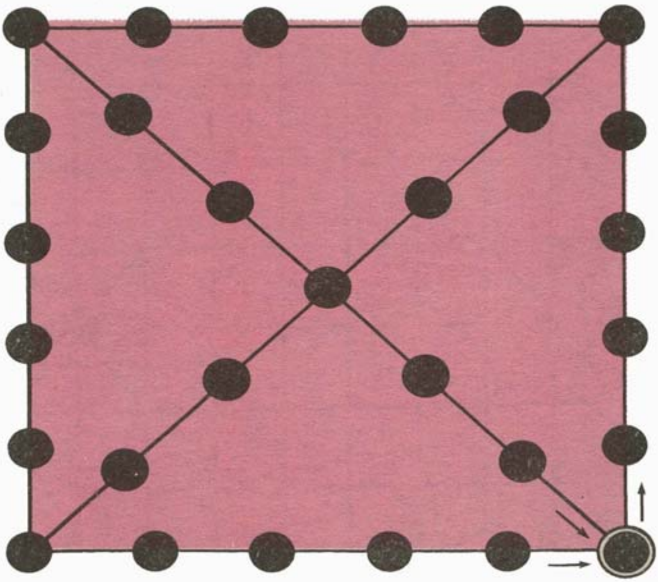
駒はそれぞれ王が 1 枚、車、馬、象、士、包が 2 枚、兵卒が５枚、計 16 枚が並べられる。朝鮮将棋は構成が簡便であるが、指し手が合理的で変化に富み、妙手を要するので、興趣がつきない。

ユッ遊びはユッと言われる投げ棒や采を投げて出る点数によって駒を進める女性の競技である。地方によっていろいろな種類があるが、広く普及しているのは「投げ棒ユッ」「栗ユッ」「豆ユッ」である。

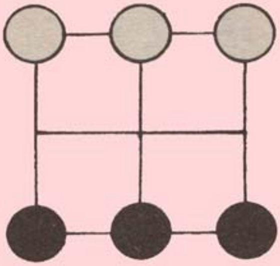
「投げ棒ユッ」は約 20 センチメートルほどの丸い木片を縦に割り、その割れ目の角をとってつくった４本の投げ棒を用い、「栗ユッ」は小指ほどの木片を 2、3 センチメートルの長さに切ったものを用いる。「栗ユッ」の名はその大きさが栗粒大であることに由来している。「豆ユッ」は小豆やいんげん豆を二つに割ったり、片側に穴をあけ色つけをした采を使う。

投げ棒や采は、その四つを投げて表が出るか裏が出るかによってそれぞれ読み方と点数が異なる。四つの投げ棒と四つの駒、

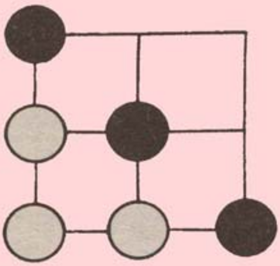
ユッ盤

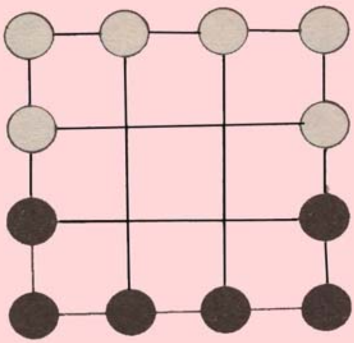


コヌ

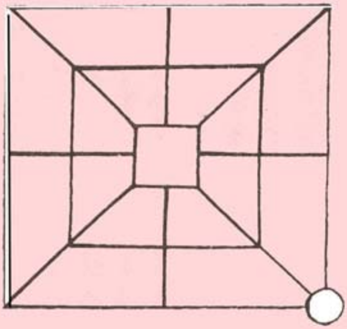


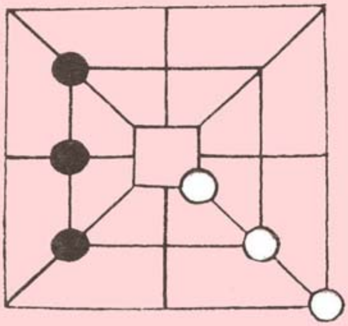
目コヌ：
駒を１目ずつ進めていき、
相手の駒を動けなくした方
が勝ちとなる





４条コヌ：
六つの駒を１目ずつ
進めて開いてを両側
から囲んで取りのけ
る。相手の駒をさき
に全部取りのぞいた
方が勝ちとなる

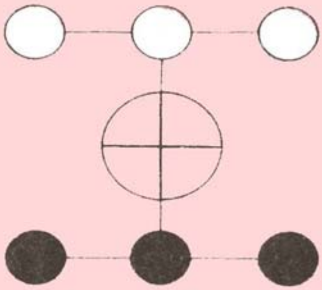




チャム・コヌ：

駒を一つずつ使って三つを並べば「コヌ」となる。「コヌ」になれば相手の駒を一つ取りのぞくことができる。
駒を取りのぞいた跡は、駒を全部詰めるまでそのまま明けておく。さらに詰めた駒を進めて「コヌ」をつくっていく。「コヌ」をつくれば相手の駒をひとつずつ取りのぞくことができる。相手の駒をさきに全部取りのぞいた方が勝ちである

ホバク・コヌ：
駒を一つずつ動かして相手の駒を動けなくした方が勝ちである。いったん相手の陣地に入った駒は戻れない



29 目のユッ盤によって勝負がおこなわれる。４本のユッを同時に投げ、その点数によってユッ盤の四つの駒を動かし、先に上がった方が勝ちとなる。ユッの投げ方に技巧を要し、駒の進め方にも頭を使わなければならない。

コヌも駒を使っておこなう競技である。この遊びでは、駒を一つずつ置いていきながら相手側の駒を取りのけて自分の駒を進めるといったやり方で、相手の駒を多く取りのけた方が勝ちとなる。コヌにもいろいろな種類がある。

仕事の合間にどこでも簡単に遊べるコヌは大衆的な遊戯となっている。

以前には碁、双六、覧勝図、数闘、骨牌、詩牌などの遊戯もおこなわれた。

農　楽

勇敢で闊達な朝鮮人民の気象をあらわし、広く普及している農楽は、民族服を身につけた大勢の人たちが広場や野辺で踊ったり歌ったりする民俗遊戯で、農業労働と結びついている。リズミカルな舞踊動作と叙情的な旋律にあふれた農楽は、田植えや草取りなどの農繁期に、仕事をはじめる前や仕事の最中または休憩どき、仕事を終えて帰る日暮れどきなどにおこなわれた。また道ぶしん、橋づくり、築堤工事、水路づくり、井戸掘り、住居の建築など共同労働のときや、祝日、綱引き、娯楽会などのときにも農楽が楽しまれた。

これには楽器を奏しながら踊る組と、仮面をつけて踊る組が

あり、前者はケンゴワリ（たたきがね）の打ち方 4、5 人をはじめ 20〜25 人で構成される。楽器は主としてどら、ケンゴワリ、杖鼓、太鼓、小鼓などの打楽器とメロディーを流すセナプ（吹奏楽器）が使われる。

ケンゴワリを打つ指揮者をサンセと呼ぶ。サンセは打ちならすケンゴワリの拍子と動作で農楽隊をリードする。その指揮能力は農楽の成果に大きな影響を及ぼす。

農楽隊の隊列はケンゴワリの打ち方が先頭に、小鼓の打ち方が奏者の最後尾に立ち、その後ろに仮面をつけた組がつづく。

なんといっても農楽で人目をひくのは衣装である。とくにケンゴワリの打ち方の毛象毛、踊り手たちの 12 尋象毛などの象毛（帽子のうえにつけた白い鳥の毛や長い紙のテープ）が印象的である。楽器の奏者はみな白いパジ（下体衣）とチョゴリ（上体衣）に藍色系統の快子（日本の陣羽織に似た上衣）を着、さまざまな色彩のたすきをかけるが、なかでも仮面をつけた踊り手たちの衣装はいっそう華やかで活動的である。一部の者は花を飾った白いかぶり物をかぶり、楽器を打ち鳴らすばちには珠玉をつけた。仮面も各人各様である。

農楽は農楽舞、農楽会、農楽歌からなり、地方ごとに多様に発達しているが、踊りの構成と動作には多くの共通性がみられる。踊りの場面構成に特徴があり、一般的に群舞場面、個人の演技を誇る独舞場面、劇的内容をもった行動舞踊場面などにわけられる。

群舞はマダンノリと言い、踊り手たちが広いマダン（場）を占め、輪になって回りながら踊る。メロディーに合わせて、自

己流の楽しい踊りをくりひろげたり、2〜4 人が 1 組になって踊ったりする。

行動舞踊は群舞の円陣のなかに仮面をつけた踊り手が加わったもので、仮面をつけた踊り手たちは主に両班官僚を風刺する踊りを踊った。そのほか軍隊の訓練や戦闘行為を形象した踊りもあった。

個人の演技をみせるクチョンノリは主に独舞、ときにはデュエットの形式でおこなわれた。杖鼓打ちの杖鼓舞、太鼓打ちの法鼓舞、小鼓打ちの小鼓舞、ケンゴワリ打ちの象毛舞がそれに属する。

農楽舞は舞踊技法上特徴があるが、基本技法は、ギャロッピング・ステップ動作と象毛を回す動作である。走るときの体のポーズはやや前屈みになる。このような動作は踊りにダイナミックな気概を与える。象毛を回す動作には、単象毛、双象毛、首振り、帆柱立てなど、数十種がある。

農楽には、農民の楽天的な生活情緒を反映したリズミカルな舞踊動作の流れとサーカス的な技巧が多分に織り込まれている。そのようなリズミカルな流れは、高く跳び早く回る動作、素早い手足の動き、変化に富むポーズ、おどけた歩行・走行動作にもとづいている。

農楽歌は仕事歌や里謡などで、立ちどまって歌ったり、行進しながら歌ったりする。また奏楽が終われば歌い、歌が終われば奏楽をつづけ、太鼓、杖鼓、ケンゴワリの伴奏に合わせても歌う。これには 1 人が音頭を取り、他の者がそれにこたえて歌う和唱がある。

農楽は今日でも劇場や大マスゲーム場でよく見られる。協同農場の決算分配のときには今日の幸せな生活をもたらした**金日成**主席と**金正日**同志への感謝の念をこめた農楽が全国各地でおこなわれ、楽しい雰囲気をかもしだす。

各種の楽器を奏でる人びとを中心に晴れ着姿の娘たちが踊りの輪をつくれば、若者たちがそれに加わり頭上のテープを振り回しダイナミックに踊りまくる光景は、高句麗時代このかたの朝鮮人民の勇敢な民族的気概を示している。

年寄りたちまで加わると踊りの輪はますます広がり、さまざまな仮面をつけた踊り手たちがユーモラスな仕草で笑いを誘い、興味をそそるのである。

農楽はもともと農事と関連して生まれたが、いまでは選挙場や遊園地、野遊会などでもさかんにおこなわれている。

仮面劇

仮面劇は古くから労働と生活のなかで生まれ発展しながら人びとに喜びと勇気を与え、敵愾心を鼓吹している。

4 世紀中葉の高句麗遺跡である安岳第 3 号墳の壁画には、3 人が楽器を奏で、1 人が仮面をつけて踊りをおどる光景が描かれている。

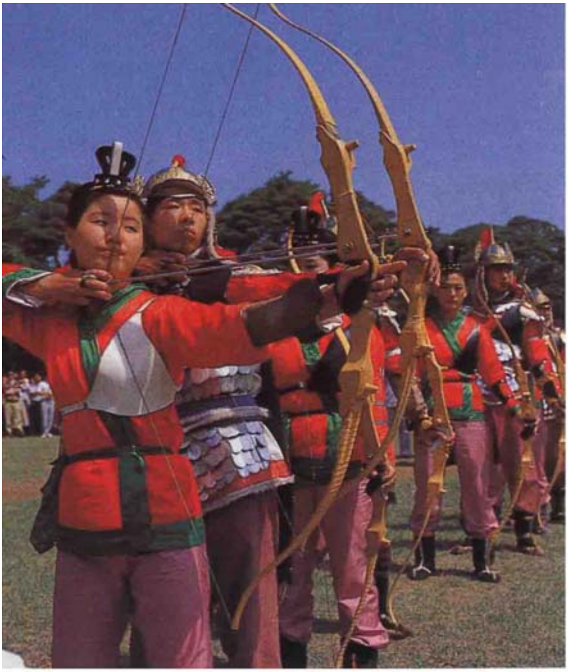
仮面劇は地方ごとに仮面の形態、上演される季節、衣装、劇の構成とその内容が異なっている。

黄海道地方の黄海道仮面劇、中部朝鮮の山台劇、南海岸地方の 5 広大仮面劇が有名であるが、なかでも黄海北道の鳳山仮面





角笛の音が荘重に響く民俗競技の入場式



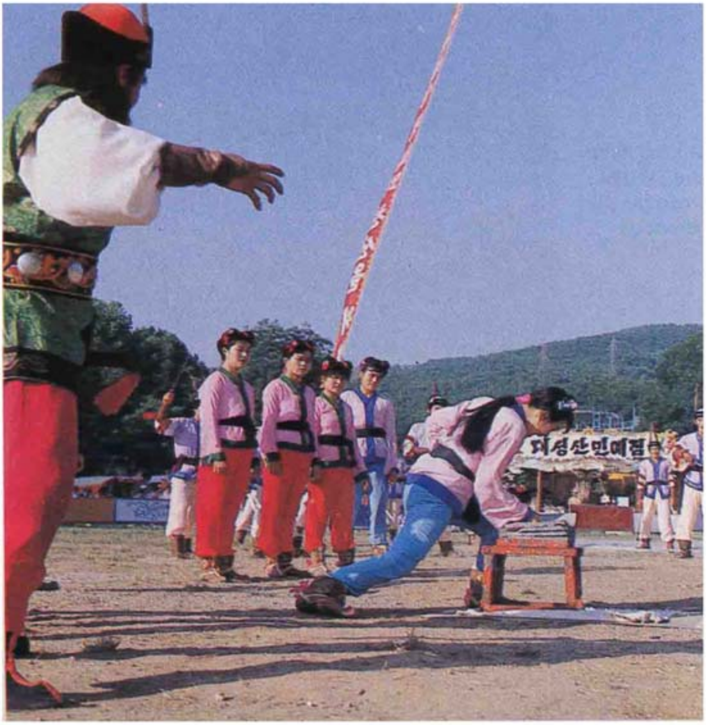
弓術と槍なげ



相撲（古画と競技の場面）





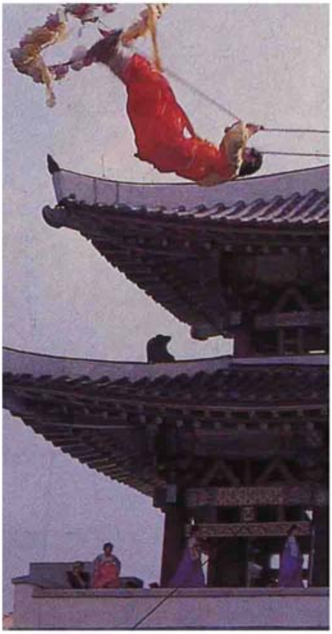


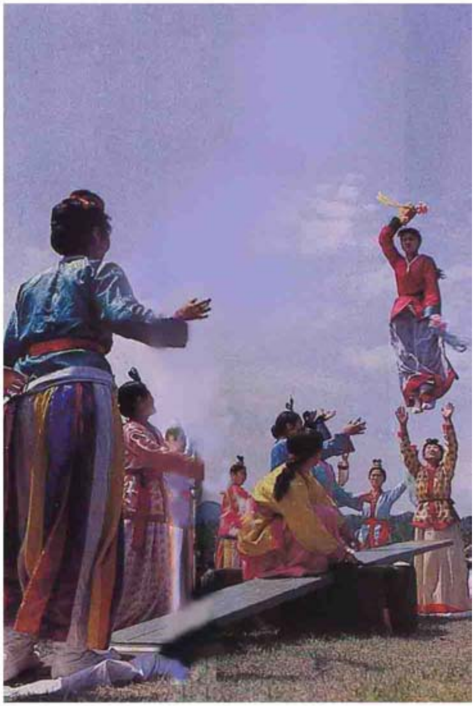




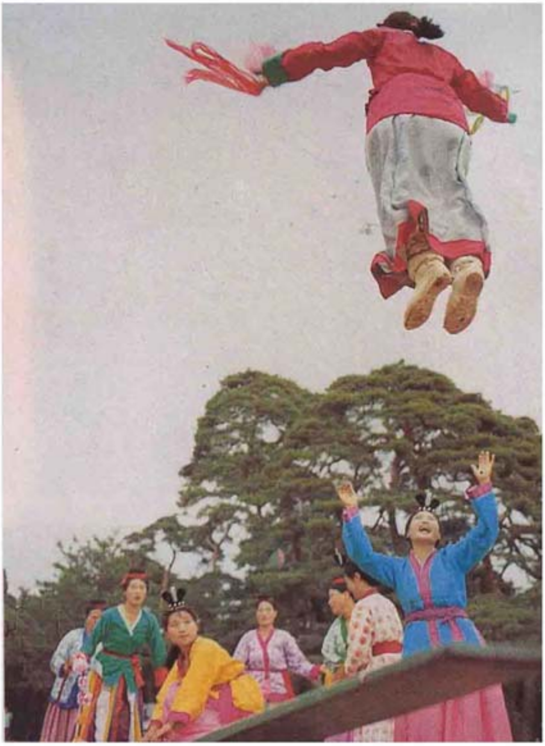


ブランコ、板とび、ユッ遊び、綱引き









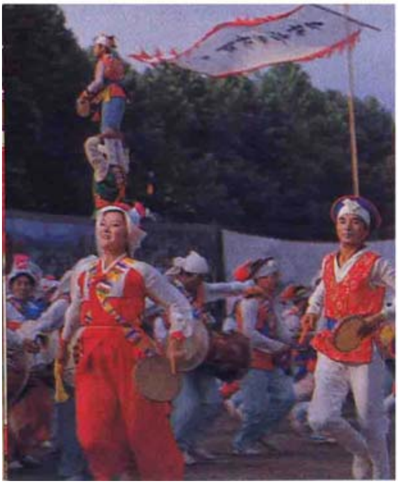


農楽舞







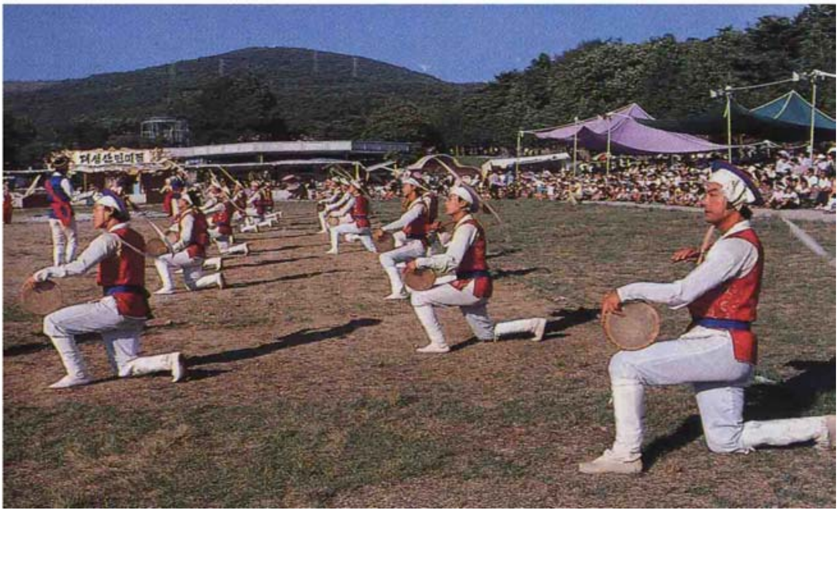










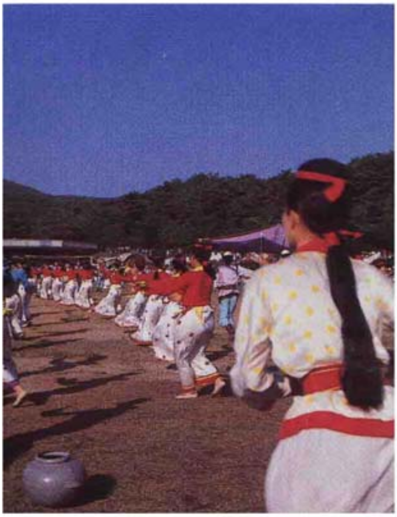




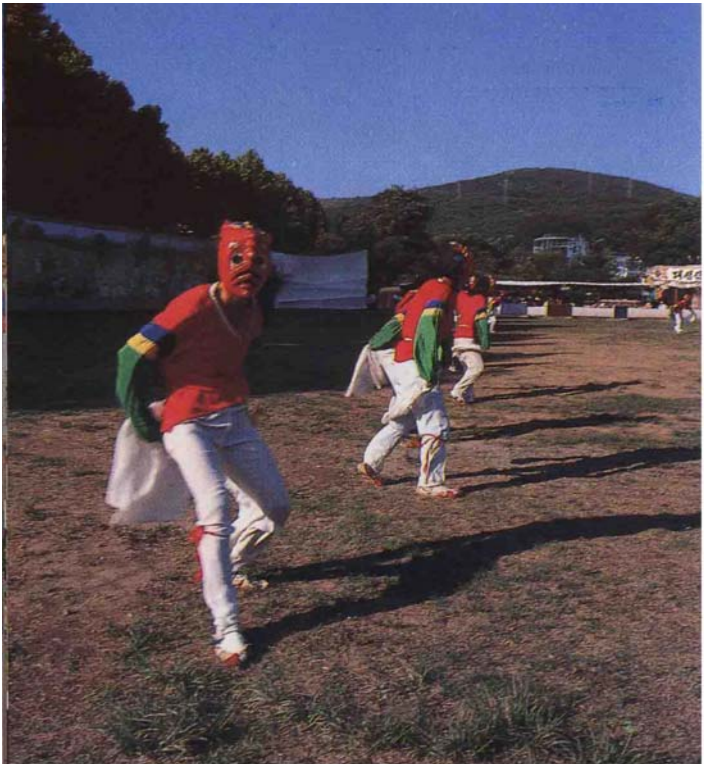
水がめ踊り



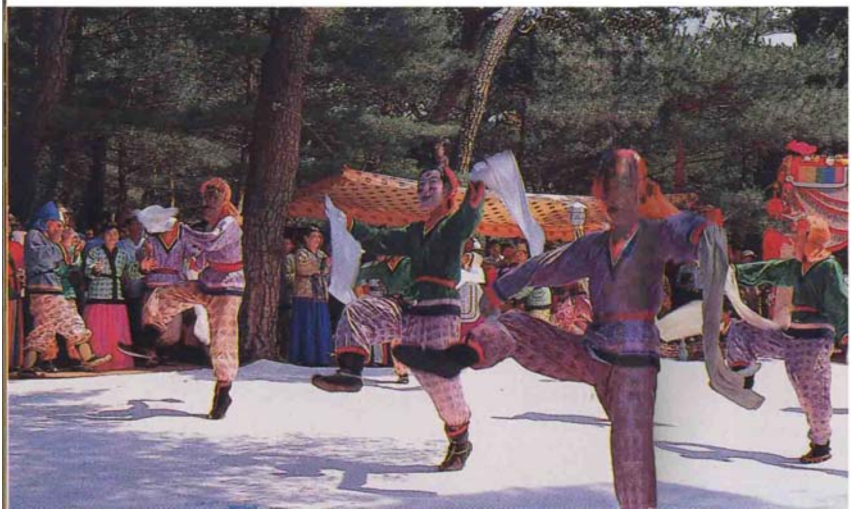








仮面劇





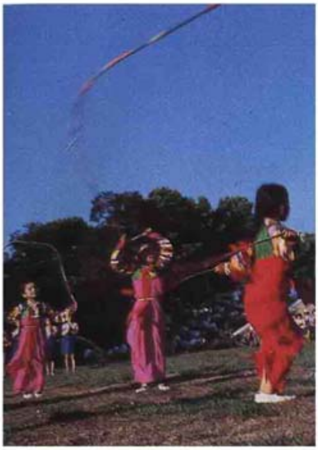
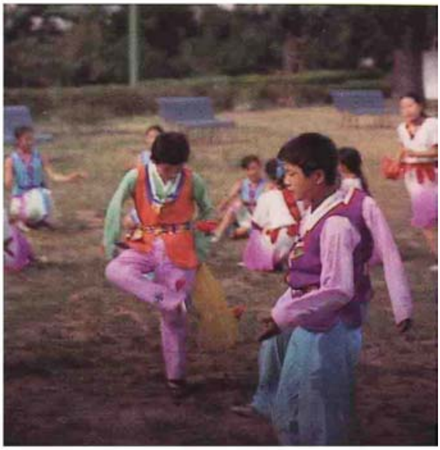


子どもの遊戯










外国人も民俗遊戯を
楽しんでいる



劇がもっとも有名である。

鳳山仮面劇はしゃれた台詞と踊り、歌が一つに融け合い、内容と形式が多様で個性的である。打鈴（朝鮮民族音楽曲調の一つ）の拍子に合わせて、独特な舞踊衣装である汗衫（かんさん）の長い袖をふり回すダイナミックな踊りは、きわめて印象的である。

北青地方の獅子舞も呼び物の一つで、漫才と仮面踊りからなり、鬼面をかぶった獅子使い、せむし男、獅子、両班、占師、医者、旅芸人、童子などが登場して両班の強欲と悪徳をあざけっている。洞簫と太鼓の伴奏に合わせて舞う獅子のノムノリ舞は楽しさにあふれ、ノッドリ舞はみるからに勇壮である。

子供の遊び

古くから伝わる子どもの遊びには、コマ回し、凧あげ、チェギ（丸い金属片を紙や布で包んだ遊び道具）蹴り、縄とび、風車、鬼ごっこ、棒遊び、そり乗り、お手玉遊び、積み木遊び、尻取り、陣取り、石けり、掌打ち、あやとりなどがある。

このように朝鮮には子供たちが室内、屋外、氷上などで好みに合わせて愉快に遊べる遊戯が多く伝わっている。

コマ回しは寿命比べ、当てゴマなどが主で、氷の上でコマを回しながらかけくらべをする遊び方もある。

コマにはパガジゴマ、銭ゴマ、大ゴマ、杖鼓ゴマ、糸ゴマなどがある。

冬も寒さに負けず氷の上でコマ回しをする子どもたちの姿は、ほほえましい。

凧あげでは、凧を遠く高くあげるわざを競う。凧あげは陰暦正月 1 日から 15 日のあいだに多くおこなわれ、15 日には凧の糸を切って飛ばす風習があった。

凧、凧あがれ
わしのようにあがれ
雲のようにあがれ
天まであがれ

子供たちはこんな歌をうたいながら、凧をあげた。凧の形は多くは長方形で、それにいろいろな彩色をほどこし、絵をかき入れた。上部に丸い標識のあるコッチ凧、下部に上部と異なる彩色をしたチマ凧、あかえい凧、いか凧、尾凧などがある。

凧あげはいまでもさかんにおこなわれ、朝鮮人民の統一にたいする念願を反映した統一凧が子供たちに好まれている。

なわとびは女子の楽しい遊びで、人数となわの回し方によって、いろいろな遊び方がある。ひとりでなわを前後に回しながらとんだり、2 人が向かいあってなわを回し、他の者がそのなかに飛び込んでなわが地面にふれるときにとんだり、張り渡したなわに足をかけてとんだりする。

2 組にわかれてなわとびをおこなうときには、負け組はなわを回しながら歌をうたい、勝ち組は 1 人あるいは数人がなわをとんでくぐりぬける。なわとびは、素早いリズミカルな動作と楽しい歌で、女の子に好まれている。

男の子に好まれる遊びの一つはチェギ蹴りである。

『東国歳時記』という古書によれば、もともと大人もチェギ蹴りをしたが、足の力を競い、勝負のときはチェギを地面に落とさないでつづけざまに蹴る者の勝ちであると記されている。

2 人あるいは数人が 2 組にわかれて遊ぶこともできる。勝ち組は負け組の投げるチェギを思いきり遠くへ蹴とばしてしまう。

チェギ蹴りにも、1 人で蹴るもの、2 人が向かい合って蹴るもの、数人がチェギを回し蹴りにするものなど、いろいろな遊び方がある。美しく彩色したチェギをまりのように巧みに蹴あげるわざを競うチェギ蹴りも、子どもたちに人気のある遊びとして普及している。

5　儀　礼



古来朝鮮は儀礼を重んずる「東方礼儀之国」として知られている。

儀礼は歳月とともに形式や方法も移り変わり、また階級や身分、性別や年齢によってさまざまな相違があった。しかし朝鮮固有の儀礼は、長い歴史の流れのなかで、清らかで飾りけがなく、高尚でしかも親しみのこもったものとなって伝わっている。

あいさつ

目上の人を敬い、年少者をいたわり、温かい心で他人を助ける朝鮮の伝統的な風習は、人とあったときにていねいに頭を下げる礼儀作法によく現れている。もちろん年齢差によって頭を下げる程度の違いはあるが、昔は、階級や身分によって大仰に腰をおったりひれふしたりして礼をする弊風もあった。今日では、久々の対面や長い別れのあいさつ、年長者への年賀や儀式などで腰を低くして礼をする。

隣近所の慶事を祝い、悲しみをともにし、ごちそうを分け合い、互いにむつまじく助け合う良風や、年少者をいとおしみ、老人を尊敬し、男女の高尚な道徳を重んじ、客を厚くもてなす美風は今日もなお勤労者の間でりっぱにうけつがれている。

18 世紀の末に世界を周遊したロシアの旅行家グルイナウは、

旅行記に朝鮮の印象をこう書いている。

「朝鮮人は終始、親切にもてなしてくれるので、旅行者はすっかり魅せられてしまう。世界にこれほど魅力的な気質をもった人民はまずいないだろう」

誕生祝い

幼児の誕生日を祝う習俗・儀礼に百日祝いと満 1 歳の初誕生祝いとがある。

生後 100 日目におこなわれる百日祝いは身内や隣近所が集まって子供の健康を祝う習わしで、子供に服やおもちゃなどの記念品が贈られる。

名づけは生後間もなくおこなわれるが、朝鮮文字の 2 字もしくは 1 字で名をつけ、兄弟は大体名前の一字を同じくする風習がある。

古くは、幼名と本名があり、また字や号をつける風習があった。

初誕生日には、食卓をごちそうで飾りたて、親類縁者や知人が子供の健康と将来を祝って贈り物をする。

還暦や回婚式（結婚 60 周年の祝い）にも家族や親戚、知人、近隣が集まって祝宴を張り、健康と長寿を祝うのである。

婚　礼

婚礼は、家庭でもっとも盛大におこなわれる祝儀である。

古来朝鮮では、本貫（原籍）が同一姓氏の場合、婚姻を結ばず、近親間の結婚も禁忌とされていた。

挙式は、新婦方と新郎方でそれぞれ披露の宴を張るのが普通で、昔は新郎がロバにまたがって新婦の家へ行き、花嫁を輿や花車に乗せて連れてくる習俗があった。そのさい花婿は家庭円満のしるしとして木雁もしくは生きた雁を持参した。

披露宴で新郎新婦はひさごで酒をつぎ杯を酌み交わし、平伏の礼をした。

花嫁はなつめときじの干し肉をしゅうと、しゅうとめに捧げ、平伏の礼をする風習があった。

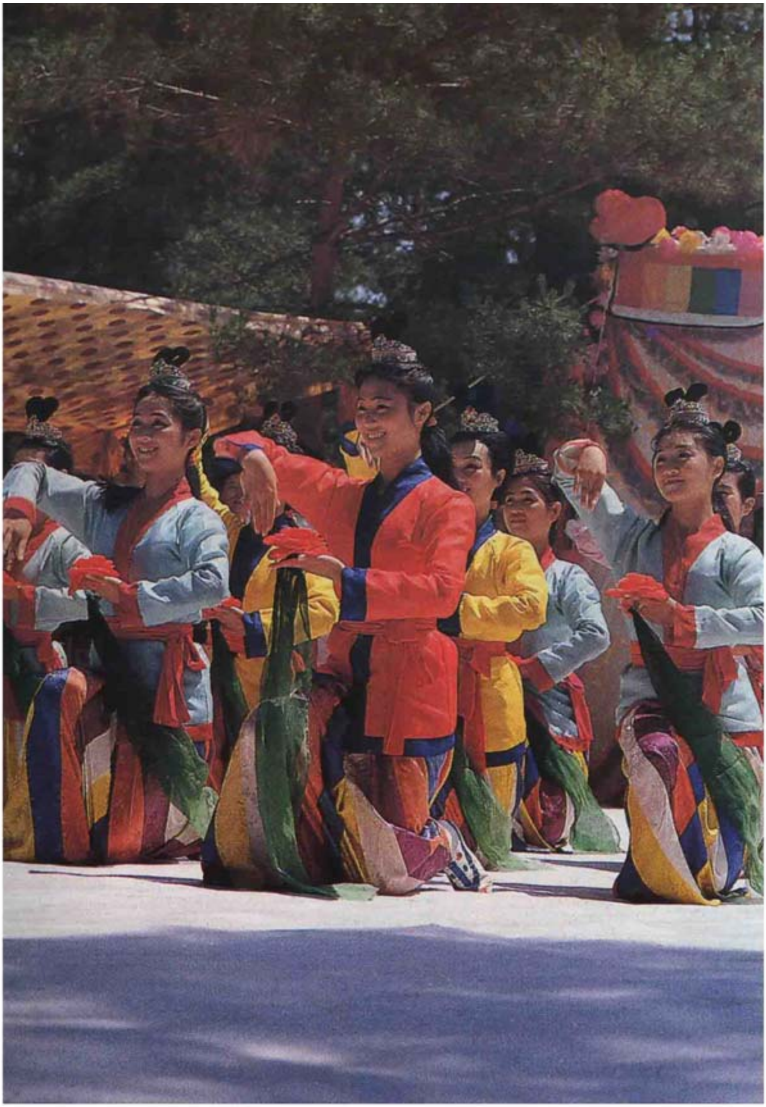
婚礼衣装は、新郎が紗帽冠帯という古式ゆかしい礼服を着用し、新婦は七宝丹粧の華やかな礼服をまとった。

結婚式が終わると、新婦は新郎を連れて里帰りをしたが、その際は新婦側の親戚が祝宴を催して新婚夫婦の門出を祝うならわしがある。

葬　礼

葬儀は普通 3 日葬で、古くは 5 日葬、7 日葬、9 日葬をおこなうこともあった。霊柩は輿で墓地へ運んだが、今日では霊柩車を使う。霊柩は土葬され、適当な大きさの土まんじゅうを築き、芝を植える。墓前に平石を据え、かたわらに石碑を立てる。

中秋には墓参りをして死者を供養する。



婚礼祝いの踊り



高句麗時代の結婚式





李朝時代の結婚式





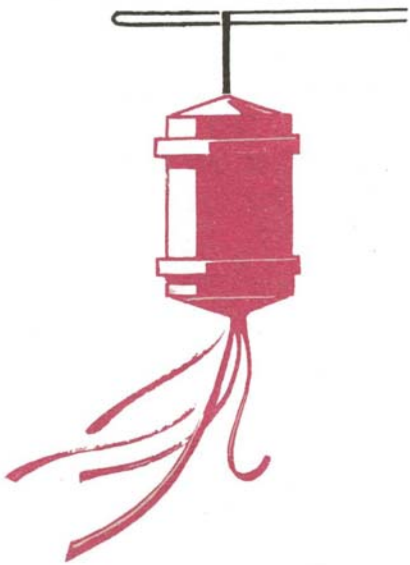








6　祝祭日



朝鮮の民間に伝わる祝祭日（月日を数えるのに陰暦を用いた）は数千年の歴史をもっている。

すでに古朝鮮には舞天（10 月）、扶余には迎鼓（12 月）という祭日があった。

中世の三国時代には、元旦（1 月 1 日）、上巳（3 月 3 日）、流頭（6 月 15 日）、七夕（7 月 7 日）、中秋（８月 15 日）、重陽（９月 9 日）、10 月のサンタル、霜月の冬至、師走の望日など、主に農事と関連のある節日があった。

高麗時代に入ってからは 4 月の燃燈会、10 月の八関会などの行事もおこなわれた。

今日朝鮮人民は、革命的記念日を意義深く祝うとともに、古くから伝えられてきた祝祭日も多彩に祝っている。

正　月

1 月の祝日は元日と小正月である。

新年を迎えて家の内外をきれいに掃除し、ソルビム（正月の晴れ着）に着替えて村の年長者に歳拝（年賀のあいさつ）をし、つぎに友だちや近所に年始回りをする。

正月の食品として雑煮と屠蘇をあげることができる。

民俗遊戯のユッ遊びと板とびもさかんにおこなわれている。

小正月は新年の月見ということで、大正月と共に盛大に過ごした。15 日には薬飯を食べ裏山にのぼって月見をし、その前夜には、粟、もろこし、きび、小豆、もち米で五穀飯をつくって食べる風習がある･

この日、豊作を祈願し、もろこしのわらで五穀のいなむらを作って立てた。

そのほか、たいまつで野原の枯れ草を焼く野火遊びなど、地方によっていろいろな民俗行事がおこなわれた。

中秋と七夕

嘉俳日ともいわれた中秋は秋の代表的な祝日で、取り入れをひかえて豊作を祝う行事が催される。この日は新米でこしらえた食べ物をもって墓参りするのが古くからのならわしである。

また相撲、ブランコのりなどの民俗遊戯もおこなわれ、機織り遊びでは負けた方がごちそうを振舞ったりした。そして『詼笑曲』（かいしょう）を歌い、踊りに興じた。

陰暦の 7 月 16 日からみそかごろまで続けられた機織り遊びについては、南海地方に伝わる仕事唄『機織り遊び』によく示されている。

金海の金山
長い麻は引綱
南海の南山
長い松は枝

火に煮て月に煮たて
三日月に蒸した麻綱
みそかまでかかったよ

18 世紀の詩人洪梁浩の詩編にはこう歌われている。

3 月に麻の種まき
7 月に刈り入れ
5 日間くしけずり
10 日間洗いあげ
細い手に糸巻き持ち
細目の麻布織りだせば
美しさはせみの羽のようだが
量は一にぎりにもならぬ

秋の七夕は、ほかの節日とは違って歌舞をおこなわず、ごちそうもこしらえないが、古くからこの日を祝うのは、夜空の牽牛と織女にまつわる伝説のためである。

天神、玉皇上帝の意に背いて相愛の仲となった天の川両岸の牽牛と織女が年に一度かささぎが翼を並べて渡すという「烏鵲（うじゃく）橋」で相会し、恋しさ懐かしさに時のたつのも忘れ、やがて別離の時が来て涙で別れるという話である。

七夕の日が雨がちなのは、この別れの涙が雨となって降るからだという。

古くは秋の節日に百中（7 月 15 日）というのがあって、ホミ（手鍬）洗いの行事がおこなわれたがこれについて古書につぎのような記録がある。

「農家の老人は白いあじろ笠をかぶり、農婦は青のチマをはき、かぼちゃときゅうりの菜に魚の料理をし、つぼは濁酒があふれんばかり。緑の芝生の丘、ここかしこの桑の木陰に三々五々寄り合い農事の話に花を咲かす。東家の草取りは西家に遅れ、下の田の作柄は上の田の作柄に勝ると、袖をたくし上げ陽気に踊り興じる。

1 年中苦労は絶えないが、きょう 1 日だけは楽しい…」

冬　至

冬至は冬の代表的な節日なので、陰暦 11 月を冬至の月とも言った。

この日は小豆粥にもろこし粉の団子を入れた「冬至粥」を食べ、ユッ遊びなどの民俗遊戯で年の暮れの夜長を楽しく過ごす風習がある。